浙江入楚

癸

9

葵

廿一歳　私源氏十九との卯月しるさ廿歳の年中此事見えたし
源氏大将ニ任見此巻　致仕大臣子為三位中将
源氏大将為東宮御後見ニ　東宮ハ冷泉院也
前坊姫宮為斎宮事　秋好中宮の事也
斎宮ト定ニ成給の事ハさかきの巻ニとりて去年ト定ニ成也
三年斎宮おりて伊勢へくたり給ふ
葵上懐妊ニ
弘徽殿后腹女三宮斎院給ニ
四月斎院二度御禊事
大将君為　勅使参儀供奉ニ
葵上見物ニ六条御息所争車事
殿上相随勤大将儀従事
賀茂祭日紫君髪削来事
与紫上同車見物給事
源典侍所扇書争寄返源氏車事
葵上煩物気ニ　六条御息所生霊
六条御息所同煩ハ源氏君お訪給ニ

斎宮可為冷泉御后也
葵上生男子也　夕霧大将是也　歳廿五
八月廿余日葵上俄卒去也
葬送鳥辺野也
源氏君着妻室服事
九月斎宮入右兵衛府事
六条御息所送付菊枝文也　源氏君有返事也
同月斎宮入野宮事
十月上旬中将除服参源氏方事
源氏於撫子寄若君御乳母宰相君於文在之事
源氏与葵上女房中納言君互物語給也
葵上中陰畢源氏君帰住事
大殿於源氏在曹司見手習并本給事
源氏参院并中宮給事
着無文袍表綾事
還二条院改服也

妻服三ヶ月也葵上八月卒故十月除服也但九十日未満除
服あるへきことはいつまても西對へまゐりつゝありて忘れ
らぬ喪服をとりかへし
源氏君与紫君始有婚姻也　女房年十四

次二歳　大将
正月一日参慶賀事
参大殿献消息於宮御方事　宮御方ハ葵上母宮也

葵

以哥為巻名

引 はかなしや人のかさせる葵ゆへ神のゆるしのけふを待ける 源典侍

和 巻名は源内侍与源氏贈答の詞よりまうけ又葵かさねの事を

論をまうし源氏廿一歳より廿二歳正月までの事あり

廿歳の年の事物語のなりてよりかんろ花宴にくはし

私云源十九才の四月より廿歳の年の事みえたり

尋ノ義畧し

花 右のとりて是を冬とせり源廿二歳の時に此巻にわり花宴を

源十九才の時のことゝし桐壷より此巻の事は物語にまうくるなし

旧説に此巻と花宴の間年のうつりあるよしいはれたるにつきて六の

説あり一説に二条大臣の花宴は二月下旬の事なり此巻

の女院の御禊は四月なれば月のうつりくはしき此月数すくなし

紹に朱雀院又桐壷院の立坊源氏是任大将女院

女宮の下定未勝にいるれましたこかりくさとや二

説に花宴に八源氏宰相中将十九にて此巻にも源

氏十九歳まで大将にて但しは待くし物にや葉ちま

共に一の年まりて宰相まで大将兼まつとしるの此巻に初し

あらはれしと説に花宴年は此巻の十二上葵上に新枕

の年ありとする十二歳ゆくまての年ゝ葵上もつきなし

賢木には八歳子は十四歳まで仍て夫葵いふれは男事あるとみて

より夫葵と八月の事といはれ四説に源宰相は冷泉

院二才し冷標乃巻にまづ十一才の時御元服あるべし

されは二年の不足あるし五説に女院の御禊は二度ある袴

女院ま入給ひんして御禊ありて又其野の御宮に入給

ひんとて御禊あるへし此巻の御禊二度の御禊也に説これ

あるし初の御禊同月にまへしや同月なれは例に

女御六説に伊勢女宮に一代に一度立たるかせまへ秋好中

宮のいつきの宮ハ朱雀院御代の斎の事しされは此巻に女宮

ハ去年より々へまりたまふを経しさりつるなれは此秋入

まつとりきれた朱雀院の御つとめけれは葵巻より

いつれの年とおへし此六ヶ条の説まて源氏の任大将は元一の

年の事とさたむへし

無品のみこにて後　准后御即位の事こゝろえかたし　弄翰日

に相並帝の位をさまさせ給ふ

を相並の位を東宮へゆつり給ふ事も此事も寛永年中にては

去るましき事なりしかと但し宗賀の記にみえたりとおほせ給ふ

此御代つゐのちくとあれたる年も寛永後百数年

なるへきにや

此上此御儀にハ御即位大嘗会なとのみならす紙

法印一禅へ御申しゝ一冊ありしとて　又東宮院の代始なれハ二条太政大臣殿

まいらせ

の女御なとのまいられしてなりしかハ源の父なる法代まて

なにかしらは御けんそおもひそまいらせ給ふ事なし

むかしとハ我つかれ中宮のひさすらへのやうに思ひ

さるへきころといひつとこ　松永出家

御身なれハてこそさもし　大納言殿か御心にかはりし大将ハ

顕儀なれハ頭のさしまいりて右具をそれしさせて給

志きは赤色ひわりなりて有りけるかし

弄
此詞よりて大将とみえたり　栄花物語六九　大将は三位中将宰相
になりせたまふ大将をさせ給ふ時宰相の大将と申しさふらふ
るいとめでたかりけり
後二条関白師通　寛保四三廿七任之本同四月三日
兼左大将　本ニハ已上勅授
私云　六条御息所なき人
あさましきこと
私云とかくこともいつかは思ひのまつらなくし
あはれなるとうさうひめむかりたや物象まつれなる人
む　御息所なき人は前坊の御事なし
同左今　これをたふとまつねむごろなるやうたふ人のまれ御息所
私云　源の御息所ひのまきてもやもろかの前におはしまして
御かなしみのふかさてつまうくおいたまれは源へしみ給へる
人はおのかりしそのもてなしや又源へ前坊のいまくつれ給ふる
いまさらといふも物まれはつきなくといふ物の字面白し
今はまうしてはなり　さよりしは前坊の御ひとつの事なる
まゝ人のやうまて　松御腕履おもてなき人のやうに前坊

まうひおはしましす前坊の御傍つきとし　弄
今をきさきは　松弘徽殿し
む　朱雀院御位につきたまふゆゑに弘徽殿女御と申す太后こそと申
す此春より立后なるへし　私云栄花賀巻
前坊女御は中宮にて成給ひつ前坊の御代にいとまつかしきに
ぬれはうきうひきき御位なりと弘徽殿へ又の御はからひに
此事し　かうに源の前坊の御おまへさへやまし
て弘徽殿は　口裏をかしきひとつ給ふとし
松　前坊はなうひとへてまうしおほし
んやをまかり
必　院中をといふし
はあるひかうし　御位をては白縁のつれしかれきて
いまれにあらはしと　この程すこし人よろはまたもかせたまふへし
御身むかくはうつくしまてといひて
はあるまじし　をといふとかり
む　冷泉院と東宮はかさ事うさにうつしめて
めてたき事をそ
みゆうり立坊は良縁の後の事なるへし
松　冷泉立坊事　前坊まうへし　源氏も此時の事なるをまや

私云文清名別に　かれハ御心そへてまつり給ふ事の人也
思ふらんハ院中文いつれとなりとも
守 此頭のうつつき院門の源けんとにやと
大将なりより川　冷泉院にうしろミ此事を源への後見
源此時ハ右大将にて若菜巻にも十二の年より大将にて
後見あり参議大将とあるを例に源氏年 案也 御年廿九
私云若ハ源氏よりの男し二条関白まし
む 源氏をと大将といひけるとハしかるに大将ハ参議より
大臣にならぬと兼帯あるへし
に 大将　天平神護元年　近衛府
平城天皇大同四年四月廿二日改近衛大将藤原内麿 大納言真楯男
為左近衛大将改中衛大将坂上田村麿為右近衛大将
参議兼大将例 従三位
藤原房前 中衛大将 同豊成 中衛大将 以已下十人略し
藤原常行 右近衛 同伊尹 左大将 源の常なと十四人中略し
源の四中し
かさりにつきありし

私 藤原ゆくへとはいへしとおかれもし　私云此巻かり
ましやれ六条のいやもとあれ此
弄 記も此頭しかるになれやうりそりり 私曰
心 御息所しは御門のおのこゝうにし
前坊の姫宮　私 前坊とハ東宮をと辞退しまくらに一条院
なきの にしし坊とハ東宮と号あるし 右曰
む 私説中宮ハ前東宮の御息所ハ中六条御息所にし斎宮下定
ハ去年此宮なりたまへやけ秋野にうけし入なへんしたてら
此又明年野行のまうあり
私 此前坊相御門の御まりと
斎宮しきのつしたハ
去年朱雀院の代まつ始めト定して斎宮と定られて
御けまりし入ひ明年ていりまのへまし
ト定ありて三年めハくらりまへまし比か秋に同し
斎宮事　曰 崇神天六年以天照太神託鍬入姫祭於倭笠
縫邑以大国魂神託渟名城入姫令祭垂仁天皇廿五年 丙辰

三月休神宮御誕宣奉祝伊勢國五十鈴川上次第二皇子倭
姫令合著御杖給是齊宮始也　景行天皇康二十年第二
皇女奉仕天照太神延喜神宮式曰凡天皇即位者定伊勢太
神宮斎王卯簡内親王未嫁者卜定若無内親王依世次
簡諸女王卜之

大将の御かたへも
　　秘　六条御息所は源のさためかたし
　私御息所なんと　まれの御かへしにてもおかしうてまさる
とかくして御息所なへくて御文をなすみをくり
　　秘蔵のおさゝくしたまふなし
おさる子御おりさるに
　　かこはをてなり
うとつけく
　　秘　源の心にはよそよそかに見ゆるは具
くちりやしうまし
しくくくまし　と　たわもとこと
　秘蔵の御心に御息所の門しおかしくかゝるは不思の車行かひ
のさまわりて文葵のあはれまさるにあらす
　あらはしく伊勢へつかはしくたりてはし
浣すもり給ふ　桐みかとしりしめて御ことのまもり

　秘蔵の御事とは源氏御心をしつめて御息所の伊勢へやう
さらんとおかしとおほしめし
わか身の
おかしとき給へし　秘　又兄のの源氏の御例にこ宮は前坊にみえし御身にし
をしなへてさ　源の御息所の心やまさりてあかしのかたとの事
いと頼しきさま　ことをまもりてこれはひろくくもりて
あきてかなしくて頼もしき事一ツ又御息所のもとにむかへやらん
有てむかへし
秋をはそてけにとしてら　　秘　秘蔵をよその人にもおなしくやらんや
まゆかんまおかはとし
いつきにつきても　ゆかしきにつきては御息所へ源のかよひ
まふ程のしいよろつかなしきさりとし
んのもとをそまもりせく　かろうかなるやうにかたとかよひ
まめのいおもしき事　おかしき事あらせめて然りとも
あ程の頼へきしろくさし頼は御息所のもとのへきすゝし
　　秘　源の心にも女御まいりのつかへしまかて
わかかちかをし

人のことゝ

桐壺は源氏のちゝ也　又帝は御羽衣親王也　六条息所のあはれなるまな

こよりいてきたまふ　如月

春宮の御母也　　花つる人のうへにのみしまし

女御藤壺は弘徽殿の女御をさかりつけむくもなくしめしてりし

よく院のときさうし給ふ

式部卿宮の御女朝顔の斎院　源氏なくなくなけかれし

又御名も夕かほを君とよそへり　源の心は御かたに

一旦の御心さしふかく　如源ハよみつれみなしくしき如まの

やうに思ひしるかな心の人の心なう御身につれなくなり

御息所と源氏の君は似たまひたるといふ　かやうの事は帝

の御心にもつきぬことゆゑ　いよいよ思ひてそのかなしさ

又あはれてか　如かやうに現れぬとかくゆくへもしらぬ事なり

女も其まぎれの事思ひのよふなし

女を君をはなれ給ふかな　如息所の九歳の源氏一品を給ふまてなし

此此の年は息所の十まて何かと見れはすこし御息所ハ源氏は八のこれ

つゝなり　弄月

つけおりれね　如息所の事は心をあまりになるによりて源へ勘当のゆゑし

それは心つきもとりひかさるに　弄源の心といふは息所の事

春にまつにつけ心やうなくすくまに思ひをそてなし

御かうと息所の事にハらしめしくるかし　秋まてすこしても見ても源の心と云

隠まほろしのさまゝし　秋の息所の心なるらん

あはうしもあはれぬ　秋の源の心うつらぬ

わかしなきさかり　秋の息所の心なし

秋隠ますしめしかもせ世の人のなをこゝろなきなそくしるらむと源

のおほえいつしくなりしわれは女のうちより年のちらい

このことはりをつとめやうかなとおほゆれに源の方々して

おきてくおもてへあしはつねにさとさのやうにて御息所の

人々のすくまれはみしうつらねおなしこゝろけぬものしき

をりこつけすまことにすへしてゝ御息所の人市にことよみ歌

桐の御姫君　桃園式部卿の姫君源氏にまさりとしよりのちの斎院なり

かくまてまことにへと横の名ハ篤子ものゝ奏ふ人への語ありけし　弄月

秘云すゞろなることハ六条御息所の人々ともてなしきこえてゐたるくるしさ
おぼゆ　源氏物語の一部の内貞女ハ槿姫と空蟬と
人也しと　秘 六条御息所ハよくまつりて見えさせおはしまして
車所をまち申さぬなりけれ頭にも　源氏の御心の内のおほむねとはいふべし
それもまたさわがしきかたもありしほどの大殿にもかゝる事ありけるまゝに
まうでんかたちて　秘 槿ハ源氏の御ためなにとなきかなひ申されけるうちに
ことさらハあるかたなけれども人ハ大将になると源氏も御心にかけておはしける
大殿なりしをも　葵上とし
かゝることは御息所の一ツ又槿姫君などのかたし
あまりつゝまね　秘 葵上なとはまいりてやうやうなきほどにこそ源氏の事
くつみ給ハさらぬやうなれどもそのこゝろもちゐにはなれし
中云源のうちてもおもへる好色の称し
のたまひしまゝの　秘 葵上なれど事　秘 懐妊し
御心つくしくあはれと　源の心なり
それもくるしきものを　をハ又大臣女三宮の御下心なし
也也　あつかへるところかれ

さぬしれなりしみ　御物なとのもつれなし
おかしきこゝろとは　秘 御息所のひとへに御むかひにきこえさせなり
口 是ハ六条をやとゞるへいひしこゝろおかしきをと云
中云六条院へ又おすまひの事ありまうでしゝ人もてなし
おかしかりしとハ是も葉しくうらやむへし
それ此斎院おりゐ給ひて　秘 此斎院御出て所ゝ自然おりゐ給ひ
口 斎院事
親王為斎王　嵯峨天皇弘仁元年置斎院以皇女有智内
以簡内親王未嫁者卜定　延喜神祇式云凡天皇即位定賀茂大神斎王
斎院もうせ給ぬしかるはいかゞ斎院の　蓮生まうすゆゑはかゝるいはれも
きさいにもみれ女三宮にゆづり給ひぬ　秘 弘徽殿腹の女宮ゆゑに御
うちにはあかぬ下　桐壺御子皇女御母弘徽殿の左右
秘 延喜式云凡定斎王年即卜定畢内使不為初斎院即就便門
以穢悪の入　又云斎王亦初斎院三年其年四月将参
神社先擇吉日臨流祓禊　即廻給使由野宮
又云凡斎王毎年四月中酉日参上下両社祭

今案賀茂の無俵ハト定ありて後東河ニのりと坂くゝり之ま
ゐりありてまゝくニ御無俵へ入事ぶ御無俵とハ大円中に大勝織
或ハ尤近年かしと坂しても作ても之年茯来のすあり
きそ年此四月ニ古社へまいり坂りんとて其比あるニ吉日と撰て
又郎様の本あり納宗助の野女ニ入事ぶ是と二度此様とし
いふそて中此間の日賀茂社へ参りすて我ぶゝまたとひ過
毎年の古様ハ必年月られと作をらし今女之分ハ相堂立伝
讓本此技ト定ありて御無俵へ入路千し御分此様のすは
此御法ニ見んと此いまよ山县よ以るの神宮へ入坂りんとでる
二度の様をいそうその哀ハ神宮の使ニハ勅使参儀一人供奉
きそ二度此様ニハ大仰て中納言参議以下あまた供奉を毎年
此様ニハ一向ニ供奉せ此此度ハ否ともゐすさしまうそそう事
ろれとてありいの二度此様うさうしたし御宮此事ハ見とさる
ちうてそにかり　女之分此安俵ニ立路す神すかとにつき
てつくゝしき事ハあかりうへし
てとゐさうれさう人よ　おニ立坂へまヽへかに存ニ立坂し

かんまさるれと
今うと見てさら
神　神鉢　秘神事
ゆゝすとへうくし
中書定はゝるすとあしてりつておりをへ全よるまするかとし
こけいの日うんさうあるすと　近衛式ニ二度の様此勅使ニハ
大仰て中納言名一人参儀二人四位五位名四人とんくく十二
人勅使しそれを數さうまうとハいそう源氏大将ハ参儀二人
のうりなりへしうれをとりて是をいうすけ奏ニいうる二度の
様らさうひあき物し河海なともすとふゆるりさらにかりて去所
きうあし　事ノ義ちニ見ノ器之
安俵とト定して二度の様あり是ハ其二立此様と見んとも
花色ノくかし
おそてたに　人をこうりいてとなり
かうきれの子ゝ人のそち皮此りん馬なり　仏様の日此勅使名
いハ深装束をまんまて馬ニハ唐鞍或ハ條鞍を用ふ杏葉を付うし
かく今日此時の日ハ皆深装束として下さまうへの様もまたニ深て用うし
少太さし法式あるうへまとうつておふさかかゝうへ物語のかさうにまをすせうし

よりわきたるせんしにて大将の君もつかうまつり給

は 斎院御禊大将前駆例可勘之

を 国史云貞観三年四月十二日丙辰賀茂斎内親王臨鴨水

禊是日使入[illegible]野斎院勅大納言正三位兼行右近大将源朝

左宮監送之と斎院御禊に大将供奉之例也

如 大将供奉之例 玉ゐる(?)りて見えらり

物みくるま心つかひしけり

たゝ禊すとておもして川つ(?)給ふ源氏君なとの供奉に如し

一条のおほち 此大路大内裏の北大路なるよりて所ひ

ろきし むくつけき大丈(?)れ

所々の御さしき 御桟敷なり

人の袖くちさへ 御禊の使まてさそふ(?)の(?)すか(?)は右(?)の(?)紋の

神わさなれは物見なりけりし

大殿には 如 葵上なり

御心ちさへなやましけれは 葵上は御心ちもよろしからぬ(?)なれは

思しかけさりけるを 懐妊ゆへたわふれもなかりし

わかき人々いてやおのかとち 葵上にさふらふ人々の物見んともよほす

はえなし 家来の(?)ひとりて見(?)んはいとさひしうなるへしとなり

おほよそ人たには けふの物みには大将殿をこそ(?) おほくの人は源氏をみんとてまいる

きん(?)かれをみんまいりのあやしき山かつもみな(?)見たてまつらんとすなれ

とをき国々より妻子をひきくしつゝ

あまりもはへるかなと

大宮きこしめして 弁 葵の母宮也 女房のさゝやくを大宮きこしめして

きこしめし 如 日

御心ちもよろしき 葵の御心ち也

さふらふ人々もさうさうしけなめり 女房たちもおほくみたく(?)おもふ(?)なれは

俄にめくらし 弁 車のしたくをめしてにはかにけはしつたへて

儀式もわさとならぬさまにて 此車は供の人なとをもあまためしつれさるを云

日たけゆきて

所なくたちわたりたるに 如 儀式なきさまなるに車のたち

ならふ所もなきにわさとならぬ(?)

はこえ(?)なとしてたちわつらひけるを 御車をたてかぬるに

わかき人々のさかしらにおほくとりて雑々の人なき隙をたつ

ゐし(?)これは御車の所をさふらひもあかしあり

きしもとさきとあつる

葵の見物に出給ふは懐妊の(?)物をもてあつかひ侍らさりし

むまともかくやうように　是ハ初より立たる御息所の車と云
よそほしくひきつゞきて立わづらふ　よそほしくいかめしく也
たちわづらふとハいふまでも葵の上の御方の車也
ぬけくたる車数なとあまた御方の人の様なるハまてまつる也
よき女房車おほくてさらく人なきひまを
雑人なきとハ下人なき所をさして也　雑人の事也
葵の上の車をとゞめんとさしのけさせて是へまいらせん也
此女車とも　御中ニ六条の御息所の車にて　網代車のすこしなれたるか
めんしろきをえらみたる
とくかくすのもの見えしうちえなる常よりかはりて
旧凡車ハ唐庇檳榔庇毛車なとハ檳榔をもて葺
網代なとハ竹をあしろにくみたる今の御息所の網代ハそれとさる
めてし但尾眉ハまた未濃の下にくれなゐの網代ハ下簾
をとりにしてさて女房の乗用ゐるは八葉の車ハ下ざま
ましきかたにてはいつれとしてもかゝる遠かりくへし
しのびてハうちさりとてハちとうつしきをいふ也
宮ハ御息所のものゝ心わきてうちふるまひし車に宮まで
いさゝかうつして　御息所の御のくるしさよ
袖くちのもの色あひなと　行　衫きぬの上にかさねたる
旧唐衣ハ裳をとき重ねるもの　汗衫ハ童女のきる物
をきるにやつれたる　ことさらにやつれたりと見ゆるはうつくしき心
車ふたつ　いかれかやうの御息所の供の女房なとあるへし
まやうにさしのきたる　旧御息所の方の人のいひて自余の車の
やうハさせしと也
いつくさをわかきものとものたるとて　いかうさすとハ御息所方
のへとも葵上方の人々とも
旧よろきものゝものを沈酔しまさる劇なるをひかぬさまし
おとなしき御前の人々
葵上御息所の車に供なとしたる人々なり　旧御前の前駈也
御息所の御母にやまたもみへらる　旧宮子の御息所也
御のうちとくとくおりしましまさて乱るゝもいかにも
つきなくつきて　旧人々おしとゝめさせまさしき

やすまさ御息所のつねやうに供奉の人々も葵方の人々ハそのものゝ見知らし
さいふうてハさるいもせて　必やうないもせそうとかられけりいはひしやう
葵方の人々のいふし六条息所とこうそかられけり
ちいまやてなすくいふあり
大かたとへうけるま　葵上方の人の詞
むご豪家しきんりんかうといふ心源をもそ持つまハうそうらん
かくしいかかり
そのさたのことも　そのにとにハ源の方の人々し葵の上の供奉ハ又大
臣の人々も源の上方の人々もあらしの源氏の方の人々ハ六条息所の
さよくアんないハ名乗かゝるとアんなうる六条息所の方の人々せんも
いうまでもそうまう見えてあるらむ　やまひ
六条息所とハ大臣の子にして今もさうしてハもうねおやうつを
随従のさるやわかうしとあり　非世事をさうし不審あり
法のる御車よも　葵上のた車をそうてなくし
人々よひ　御見人人彼　出車名也　権記に多く此名あり
此法かぬて枕草子云よりの出車の人々よもひなうと数多けりけりて

むご出車とハ云方よりの點せしまゝてのもの人々たちいくつ人々にあるし
枕草子云かゝりのうち立つきるかうまよりの御車の車人々ゑまうし
いつきそておわかなといつかにさらんともらんとうれ祈するに
前もうてたりつよかりそふて車よそとかのけのせまとまこ
をつゆきまうて物もみえる　御息所の御車の方も
んやましきとハ　人やましきとハ車あまやりくるまて物も
見えぬさまにてしわりわさとやりいゑいなさとうや御息
所とまうてりよくましの車のうつろふもと
見物のけりなる人々きうしゆうより
かへりて　※御息所の心
よりかゝるもらるとしかゝまうて　にハ前は女房車まで櫂とて
一勢女車まハ櫂とまふのりくるれせもかりんてあしアりにハ二ツ
必牛かつてそうつるし　松牛かつハ櫂とも申車なりし
車のうつり　牛さまと申統用し　保名記
何よきうもんとかなま　御息所の心

物見たく　見物せられてし
さゆりいそんのひまもなく　あまり見物人のおほさし
てうりぬと　私云や女房の行列おほきとし
はつき人のお前わたられ　御息所のつき人ハ源し
のよりしや　御息所の車を見しりて　あやう
けれくもわするあり様ハまや　影をとゝめうし
同古今御註云
そこのくまのの御手洗川に影をうつしてなりし　我身人ゝけをみちらん
影をとゝめうらんと云ゝさらくもまうたかねハつれなくる
まゝてト此御息所のに影とのとみをし川のつれなきふとを
字　此川云古て神垣云し神ゝまうりあめく御息し
私　むのゝ御手洗川よ影ゝあくれるのを以て以てし御息所方をは
ニや給もしきて　なもくと影をとゞまらんとも大切さうてまを
ちりなしてみをつくしある源のほとりうらやまし御方もみらりや
私云　是ハ兼める影をとゞまらんと家さゝめく源の影をとゝま
らんとし源の方より影をとゞまらんてしもおほきに思ハしいまさら
まゝつまりを　前に物見ん車ことゞ無(?)れしゆつへおもうりてし

ちるめにさゝめ給て　以　源のつれなくて見知く目とゝめ給ふあると
大宮のハきよきれハ　私　葵上なり
御供の人ハ下葵上と見知給ひて実しくそこまかりし
御とものの人て　源の供なる人こ此葵上の車の御前をしれとは
しそ見らゝさせしいふく御息所の御わたしく見をかし
さゝけられさる　御息所の御車ハまめやかにうちの見つるね方は
車をとしやらまへてこそ供なる人まくされたといゝてしるとハ
てゝのわけれおほ遣りもこそひめて給の宮ハなりおはなき席子
猶ハ一段御息所ハ浅くおほくきさもにかれなかせり
六条御息所
かけをのみみたらし川のつれなきに身のうきほとそいとゝしらるゝ
以　けふの無礼源あり　少も云んあらハこし
私　御息所源をハ我のと頼人しも源ハさともなき事とよみつ
武御流にちりしぬ人ゝをとゞまらんの身をしまにわらちて
おのされくもにさまあらねかてい影のゆく深きなり
也　右へ一首しとみたらし川にゆし　みそて秋ハ影をとめぬをかしる
此哥を家々の中

いみかも川ハ秋山よりなかれおつ賀茂社西布祢片岡の中
よりとをる川也此歌よ供奉の前よあるらくい
まさみかも川とよめる歌のあり松尾社まてなかしも川とよ
める但松尾ハ賀茂一体の神なる故龍田三所の神の
此歌なりけるをみかもしといふ也きく
兼盛三位の歌あさ霜なりみかも川といふ室也けりし
あらむこれは　男上御名のしけるなし
人の心寄を　此源氏物語のうらなしを見ぬかたふ女房すさみ
めもおやかなる　月もおやハあやしさ花の色なるなりし
系図ハ源とこゝにまうしとめもおやみえてけさハ如何あれ
抜捨遠後新古今集書付あともおやハ月もおやなきなし
[illegible]のちなるとこそ[illegible]の人[illegible]
見させしかハ　此卷末のかよりかゝるみすのまへ
ほとりにつきて　女院古体乃供奉たへてふよりさらん
て供奉しけるし
かんしきめハ　三の卷末以下別紙有れハかへり

刻く亦此左近ひらり　御供奉しつゝと云服よかたり也ある供奉
の人々供奉しけれとも云ていふとあるかたに源氏ハあまた名
あまた見えて自余の人々のおほえて[illegible]ともあまたと云
大将のほかり此源方左よりさせけるの[illegible]にはあれ事によもあら
もとめつゝしけれなきたるのおほりれなるさなりたるとも右大将の随身
つかうり供奉つかまつり
は大将の轉補の時一翁府宮供奉せらる例のよし左近衛府の御随
身
つきてこれに路次をたけせうゝ御くりんあらりさまゝ[illegible]にし大将ハ
かゝ中わる[illegible]ハまたけの随身ハせうゝ将曹ハさくらんし六位の将監
成るる時左右たとれせうをよふへなりれは随身とつりかにあ
まし一翁當目いゝ御すは随身ゝ供奉しけれかりし
もる[illegible]も源氏中一の雅ましとちゝくもりくもるりと[illegible]
只あら事をくりくいりきうちとかりけん
口傳云此物語の寓言也禪をもらへし源氏大将をかゝめん
よめるゝめ此物やけしるかるへし
やす源氏よハ秘するるもらゝかりもれハ[illegible]しさや
稚容所記

られまつらしにやられ事とうらしきハかう 保様より成女
しらうとんうんし
此事男一代雑事と證抄ナとしうしあうれ生るら此隠名と
かしくハ一貝しもなりくるし 近来御隠御曹府生など云人つ
かられまかりしてつかう事をいうを識りよりそ隠名を
給ひうハうきうあつて御はのうらひより苦めし貝ちりし
こかけ書てうひて一人つめしはうすとうれ隠名とりつて
假令 御き此大ね以下ハ右ハ左右ハ右の書き一人近来の人を
て六人の隠名をゆるされくめし具もらしそのう人とり禅
賀寺これ式ハ御隠将曹府生など云一人つて具ちうと一貝
られ隠名ともいふいつれも皆隠下此事し前人のそうとハ
虎上の前人の御隠といふられと一貝す具ちう事ある例
るはかんえ又此事ら時ハ先右を大御隠御曹ハ本陳す供
皆ちうふりてかうくし此一貝すめしまう此事るすとね
事し此一所の初人物うき事此なす抱き事多くし
右を此前へ此ハうハ伊予守の子 紀伊守 朝臣の家臣の家

私もの女の事をはけ時の事とやいて川つまらくあやかりさ
しらのうとをおりへてつましかての私ら修世しけん
さらねとといえどんしも 左のかれせらのかけれ隠名しらゆつり
出さらるら是ハ皆隠下し御家隠名れあるうやられ時すも移するわ
かくかしつれ隠へ名 源のさ自し
本なるとらいつねハ 論語 君子之徳風也小人之徳草也草上尚
之風必偃 訓若風行 應如草靡 文選
つかはうらく 拙 見物の女房しるし
清女仙き抱弟子をつかはしるとしく云人のハをきかり市女
笠まうすねとけゆひうらといつしまと
或抄曰きぬうねまくうら入て云人す白きをはきてち上に
帯ハ代もうし女の緑をうたしき
私二重ハ百手いうれきれてえしと此度さる笠うらひると云
おくうり此但同し神ありて市女笠といつかう笠といふ事

私勘
伊勢物語に
昔てうかうて
みまそたま
あれうへ
くらとかり
しらかれとか

又あ自かしの
伊勢物語を 私女とおそてうる此なしの物らハ假令ねすよし
女とうされあめとし人妾とも妙にめくはし

やゆしう
きんもの
魚なるやう
くらし男なる
漢て中り
世とりの
あまりし見い
女文の物と
車まうしまより
されいたさして
うらみまきる
よろん

そのまゝにしてけふ羽つきは尾のあらしにつゝみてしるしあらまや
くるひていうに　　女 老女なしの人柄にあてらるゝはよのつねにふりき
おもされてうふいてをりりと見てゆるし
廿年源の世にもくれぬるさ宮とさんともろはてとりりたえし
漢をてとくしくわらそていうなり
くらうちもけらし　　むす女なしの宮をゆかしくあるやなるし
妙ときこゆる　これもつかさう此称は　廿日
まとめてくわりていまあて　大読云一条院春日の幸ふ
御楽は大字 東三条院 給子らの世ゆるかの世東氏百姓と
神仏のやうに顔をあはせておうしまうとや
む 宋朝に司る相如と云し君子洛中に入し時は見物と多ろ
志も顔まくいふといふ事 通鑑といふ書にみえとりろ
必 花る司馬相如といひしおやまりて志つし温なる司る
おなしなるへし司る温公うなし相如は漢の代の人にてこの字と如の字
りおやゆるなるへし通鑑に宋朝通鑑なるへし司る光也
閑衛士以手加額曰司馬相公也とぞ

弄 むかし司馬相如うしろ家成にて名のつりて乃られ　廿五日
おこまりしを称る　武抄時年しこうふくいんろう物さらねやれるて
とのかわれるゆんやう　多袖とこれて源をみえまろ前し
くり入るはいさやりよあつあし　物見るかうりみあゆあし
見ときさん　源の人もうふまきかりの人し思され
みつれ称まりしれ　こちやうといふ京城の中ふて不くろうしうね幕末而
京城の中小も見れうとあれしとすう
必 らつひしさるしわれまは宿ろと云ふし
のうま白てさひ　これようぬ人まきしまさとよ本二此ま
あくへの月まられやうふていうまり
まいてこて以にうたらあのひ
源のおんなうのまいまき雑の人まそりて思まさうまろしまして
うつうやうまもそうかゝひのおりの人まりふやうに及びなま源の
内まやうよ人へく多れ般むうねと思うしつまあうきもあやふとし
式部の内の女ましきあく
秋 桃花と　弄月

え
初日の姫君は父大臣　相みえし後は涼身
いと幼きまゝて　源の女と桃園の宮の御し源の叔父し
外なしいめともしてとあはむと　如 源ときこりてのまたし藤葉加えて
此徴宮の御いころをみつきけるよりの御こんがひりいとり
姫君は　槿姫君也
さしはきこえ給ふる御あるあるを　槿姫君は四中し源は年
まゝ給ひ此はきこえすゝ姫君は此心つよくありて如くし源の
はなさむのめでたさは許しもいそとまでみゆしまくと見ゆるひて
あの御なるん人ありしらのやうに給ひは仏すゝはいかうひきてもと
つき年なりてもまして源よりいとゝいかんしまれまでけらくとはあり
さ日は槿の負めなるとありけり　弄の祭日
まさしきみてはさいあるきまゝて　此事此槿姫君は祭を見んの世ぬは
但人ありるれど　給まつきんでありて源のよ口はとみゆる神と
ころのれ君ともさしきまて祭はらんしきまさとみゆるなり
祭の日也　卯月中の酉の日し
松尾賀茂祭は卯月の方酉あり中の申日あるは書あると　いふ

これは欽明天皇の御字四月の吉日をえらびて祭給ふよし
みえたり　文和朝にはおはりて山城国司を検察せし見て
さらに此祭は賀茂の祭なりとまつりや酉の日の祭は五家より
使をさしとて走馬を競せし時あれはかりまつりし関白の賀茂
詣を同月よ　中の酉日の祭はひつて此日也をき陣まで　府
をめしく登同のしと仰せ奉る月の使は式の中おゐつてしは着
兼のつけ仰せしより葵へて葵桂の藤をとりて添し賀茂松尾
の社は上人の日より給へきころへいゑてまつる欽明御宇よ
りこ此祭はまつり下賀茂の社上賀茂別雷二の社へ祭なり
已下異を　以上公事　根源抄
松賀茂太神は山城国の地をまておはしませは中の申日は
国よりさてまつる祭し中の酉日は内裏よりの祭し着ぬ
よおほかくしまつは中の酉日の祭し此物語ふまつるも此祭し
大夜又は執り行はれし　必　葵上世祭は見物なきよし
かの御車の所あらそひ　必　源よくもりし六条の御息所し
あるとことらうにおつるる人の　弄　かれ大将殿の家風なる御らへ

心 葵上ゟ死去し四十九日おこりてみやす所ハあはれにおほしきことより
されとも御息所のあさましく（ハもつくしき）ものおもひしあまりとまりて
まつりことにもひとへにやうやう心よせ給ふ事もあらすあらし
ゝをとしく嵯峨ハうかふくいかなる大やうなるかなしからぬ事おほかると
源のこゝろなるを
ことさらにハ人々しらの　こゝやうにハいつまでもつきひのあらん（へ）し
葵上ゟ死やうにまさりけり
おもしろしはまん　　日　愠　老子
伊勢物語にあはれなる世にはなにかなりて世中とちらんせて
南まて給ひ　源のことさらにいかにあるとしてわかしてゆるまかへま
ゝとかなくさめんとなり
東宮に死すこしいの宮に　ほのかに死とハ卜定ありて六条死の御息
所の娘に死まさかへしと斎宮の死ありてなん
延喜式云凡天皇即位者定伊勢太神宮斎王仍簡内親王未
嫁者若無内親王者依世次簡諸女王卜定訖　即遣勅使於彼
家告示其由神祇祐以上一人率僚下隨勅使共向卜部解除

神祇以本綿着賢木立殿四面及内外門　今案秋好中宮
ハ去年卜定ありてしハまた宮司へ入給ひしすかたのことなりしにて
神無月にかへりまつりてさかきの死ありとかハ人きれいとかいふて
卜定ありて左衛門つかさに入へきをさりかたき事ありてまき
れての六条京極のまにおハしましひとし　寿日
榊とハ真坂木とも真坂樹とも日本紀にみえり　天照大神
あまのいはとをとちたまひし時八百万神達天香具山真坂樹
を掘とりてくいのかみの神の縁よりて榊ハ
字なり作字也　龍眼木とも云之
さかきのことなり　　神のいとくく見る露よりし
此君かみかれハ此籬のおもてにそ源を也見て
ちりと　源も此みこにてゐりしおもふらし
このみさなくし物て
んしをかりしきハ物の例色にしへるさかりのいへ源の
ハあなたへのとまりきぬとものせて
つれなやうれ源　源の袖のゆくし

くらゐ二条流よ
みつれあいり　源氏系図にあいせん人あるし
わかとまるらん　葉のおりもさし
久しうきれぬハさあらを　まさとハ源氏同車てらるへしとそ
八年まで女房ハうわかるしも君百ゐるかしハちのひらく説
羽生としれ蔵めり　女の髪風し或抄云えんさくう
こよみれりせ　暦博士　推古天皇十二年歳次甲子正月
戊午始用月
私陰陽道まし天文博士暦博士めし
まり女房いとめしそ　松くゝ源ゝ女車までりてそのへきとし
ものハ此ゝ方の女房ものしめしてもらるまでを此頃人もろさ
らうさをなるかゝみとの　只りとこのよこさ女の本ハ良の字か
うまりんれうんのもるを　浮線綾の袴し童の袴しをも葉
春ふもとみと
西宮云女親王対面時総角者着汗衫半臂下襲表袴玉帯ホ
又云宮母院の童女総角青麹塵汗衫半臂下襲表袴白柳帯
今案童晴の時ハ汗袴の上ニ表袴をきるとき又ハ寞霰なり

為常まハ表袴をとかきれ
一郎下を日　汗袴とハ枝ひきれ袴し
童女のとうのくろる子の服袴をきんをかるもしをこれかくも
かへ肉かりけさやる
白きて白ミ黒き髪のうるもえんおひらろへし
君のはくしいまれそかんとく　老の人と源のもとめのし
こまるせさとあるゝる　おまりなりまて髪のちるて世まし
いときすきんをし　其髪のさ白しいるゝ髪乃さうれ人をもか
やすなるへ中れなりし
あまりてそしきてとしふし
すさけありもん
ちひろと　髪のすへれごの羽ん子君なり
はうりすき　女為のそこれ乃るふされおひり末ハまれのまれらん
かとれきれ具足り海松を用ふし
祝多し河海説さも仰へし
九 奄上山菱山梅海書青月右二番とも也是おも髪なりたきと
さつるなりとく此正説可為

也笺上

なうつ成十一云ゝ是らうろしき事ぞふへつゝつきもうつ据し
子爲すいうくゝ志らんさしめうきみちいゝ志かゆくせけゝ宮ま
なゝ 源氏君のゐ給をいとひ給ま仕て定なき沸んとこちひゝ給
またゝ人て子なゆの海も定なきと涙まうてりいうゝ御まけ沸に
又 みちひゞ給てい源のん成さうちなきと思ふ見ふよ君ゝくなる
ひとゝてゝんつなり 弄花 思ふの事ゆし源氏めでてたとえゆて
物ゝうえつもく
もゝづて而となうし立ゆなり 弄 今日も見物車おほきよし
簇の日をおかうりし有まゝゝもしいて
じゃまれおゝゝ成かりゝり 弄 一條しおそてゝ儲宮居しし
おそてゝ儲ハ一条西洞院おとてゝ儲ハ二条大宮し
なゝ おいことハし夜やとそて左そ成てゝ儲まあり宮月成禊の時中
かねまゝ左ちうれし賀茂大宮の時ハ御除ゝて一条を東へ
よつにしつて左右の山夜の様をまてゝし
よろしき女車の 源典侍し
こゝいやハしゝて世にゝね こゝにふ也に御車をとゝれめてゝゝ

られはすさうきてゝんと源内侍成人志てやしさすし
いみゝうちきゝ兆なるん 車のなかなれは源いまゝ内侍と知ぬ節し
いみそえ給ゝ 源の返答ありて
猶さゝに いそてまれ而伊え給ふてゝらやむ人ゝゝ
扇のつまゝ折おうらく 河 桧扇し
如 桧扇のまゝしと折ゝゝやこゝうをつきてうれ
源典侍 ありかやへのさせるあつひ火神の志うしれまうつとまちもち
如 葵いあふを云んしあふへとよめう 秋のゆふしれまうつと源まゝとい
今日の葵のなよゝくとして祓しつるみ今と内車志まなまかひると
祓る人とあひのうゝなかと人のうさせうといふかゝ人す
志めのらうまいて 河 古云の祠凡て物
を 志免のおうそしいう年 あれは深きのうちおゝ人きし
私川云いまさおりゝ人は家男よてうらうらし
弄 川弁未見て物 かも人のぬしあつん成又後てゝ底四れさ
九 こゝらしをん志くうけ志あれらちハちくねお家をそ大宋の中ま
成長う名劣まあう関係御伴ゝ云の也源氏おほ給ゝまうと日時ハきれ

ともえおもせまうく従捨遣ニも此言考あ明円とハあれとも
心あるしは此代とあそハ引言なりても心ハわかれたる明円とハ
云こ代なふまけて云へきうかハ彼の中をも持えくれもも人の
志あるときこゆる源氏すれハ思ひてもひすきと云義まや但此言
をおろ歌よきたくハそれちうきぬ心源氏かしけれハもさ
しきと云まハ叶へとも 源氏物語日時ふ九之比 とそ
私云此義事を安三年ニ無之總而先ハまれせうろ此言の文
まさ用さし引言あてても心ハあるれとして義總へし
源典侍し事ふく源の見しまあらて
は 今あくハよみ侍ける詞し
かのなかし此をは
ハまめく
此源氏 かさしける心そあたにおもほゆる
は 八十氏とハ人の氏姓のたかひきんしあるなり八十ハ数多くいふを
弐八を数のうちとも百姓ともいふて八を和語数の色八十須
吉八百日行ともいふる多くし八数の限し
私 源の一定かさしいそくやしきもし八十氏人ハおかしけれ人よ
まひきやとなう物ともしまあひアシイとしし 逢日と

ハもし今ハ其方ハ古今和名ま葵あらしかけてひれまれ
みとりとしてよめると葵とかはことめく説ハ逢日と諸とも
の名ま説しる形骨曲しなきなるへし 弄ニ葵別ハ冊子界を
む 後撰身四賀茂祭の日物見侍ける女此車にいひ入て侍ける
行くりハ八十氏人のまつりまてこそきのひおもひてふすか
を 椋つしきまてもいふなりなんのあふひそふたハ年またそせし
あつしと　私 源のちとかくしとの後なし
くやしくもかさしけるかな名のみして人たのめなる草葉ハかりを
を あふひハ人のめなる草の名かなるへし
私 源典侍か云の返り　弄日
やまへんおもかし源へとうらみなるんあり　源と宗てなり
へとあひのうらく
む 菓花物語云深正宮和泉式部とかく車にいく見んのふ
式部か方の簾おろして其の紙の物見をすてく
介葉草菜を立ていゆるハおけるを如へしそれハ車の
中まえ了の帷をこえるましりてくるし　加うさうし　河ニハ大

後京極摂政家歌合にひのかそて春雨のふさみまふとある
んやきしらめりふん　源典侍のとうかんせしさへおかしとし
一月のかりあやさ夜のうらかりしらさし　源のすさ由し　後月のすし
如 是ハ無名抄ふれんへのえふんて源内侍よハおなん
松枕草子云 昨日ハ車ひとつにあまさめりてこあいの面
さしぬきわかいろきぬすそみされとれときおろ掛つゝた
しきまてみしきんしうれ安陀のゑにとそいの作らうく
うらいしうゐくをふいふかうつ作りしえくめりうら
きたれすゆんのうちの夜人　先と遊とも人のおすねし
いとまうしらねうさしわらえひつるて
行 不桃く
如 弁 源のんし　中吉面白うしね人へと云のよみかひんともかほし
以服卿んなうこしんとけへし　源内侍ハおぼえるまへてさあかね
人をいさおひのうかまつまうくてことかりしうねると
松云いてゆうしうねうさしあうかひとハ源内侍のおけの人
りさせう葉ゆ人あうとおうらひかさよ迄て源の作んよハ源
内侍への作んさしハなきし只をめうらか里て業といふすかへへとし

あうさくのゆうにつきてなれハいまさとまち成ん御おこや世中ハうさし
をおうれのえしくてあれまねこそれをいつてもしけうさぬうさ
おしらえひといいつうこゆをだかめせず
如 ゆうにいてとおするうしね人へうさ人あひのかかまつされく
如 源のんし源内侍ハおかりすまへてしやのおあきさ人あうれハ今
源の人へと同車しまうと知あうハ中つつかけまとしきしてて
安 もしかしひとといたおやと是を無おあ事し
つゆれてしさ人とあひのうかまつみてとれハきうんかきさ云四
松云おとあうしね人へとハ源内侍し面つれたま人へといてし人あ
ひのうとハけふて源としつまれてとハ源氏の見しうるなきなんいし人
曰不もくきらんりてハ文字とをうけいろあ事しまくゆしかしを
又源のん氏さて此一説の源の道まとし源へハおうて源れ
かきん人まて源内侍の文字を谈そうしさて文こうまおひらい
後ていよくいりして中うハさん　あをしもろうしく又け恋んさ
すうつまれきく在多し後つねと云常れ枕け服能と四
せへしらくまて無れ承としハうまの

うやき本ハ女御におはしましけるに　也 是より六条の御息所の事を云う
さしつかへも　源の心とくなるべくもかなたへ分かし御禊
の日の車あらそひのことがうかしくはし
源の事かゝる思ひつくしまて　源を御見の院よ思ひあへりし
あらためられてなん　伊勢への事
立よ事へく　此まて京にかりさん事し
思ひあつくみつ　こゝるさい事なし思ひくみすと伊勢ハ定る
下にもトアリ　思ひ物をとしよし給ひ　伊勢の海よつつらるあまれう
源ともみあ見のうけすれや　浮子釣たる紀なよ枝な
思すれやのひつときらめつらつ　東のくいやと思ひし
とことつゝさきまれハ心ろハ是同しもくそとまつく
也 御息所伊勢へくだりやまきましと志あんけ源氏よ釣せるあまの
うけすれやと思ふ事よりあまく面白しんひつを定家卿
あんすらとうきさうやかとあつて度てものうき所やすなりへし
又下の詞は定られる所へとあり　これ一首の哥よかゝる詞し

也 奇妙なる川なし 伊勢へ下向事なひくよ定りのすかぬし
くるう給ひんるすと　伊勢へくるう給ひん事を源ハ思ふそそ
め給ひまりぬかなり
枚考ぬ思人給　私源より紀詞しホトヽギスとさ思ひけもして
思ひうるみなしめ人の哥詞なり
いかひなきみつしとて　源よの古思ひよ紀の事は
思ふそめてる事なれとよあり
きこ給へまつる　也 おの川宮の詞
尺もき川にかつかし瀬よ　也 車あらそひの日の事し
日 万葉には禊多し　禊には河をきてきれハかるをき川ともいふ
はか思へし
大夜よハ内西のけめ給へく
御あるときかなと　源の御代初のまし　葵し
さいつ院御へんてなきうこハ　也 今年葵へ祭んはあきまかし
源も只今ハこたんなれへのすとし
中宮二条院まもとなて 里よ内の紀よ思ひハ志られなし

二条院ちかきわたりと云し也ノ義異し
めつらしき事さへ　葵の懐妊し
わか御方にて　源の御方也左大臣の方にて源の御わたりしま
心さし前わろくなりにし　注 遊仙窟云　窮鬼故調人 注云 魂与鬼通
物のけいきすたまなと
いふものおほく
弄 九條　生霊也云　又只霊の事とてほと
或抄沛流ニ人の魂の寤ニ通して来るといへり
人よりまさりつゝも　花 是は御息所の生霊なりとかゝれしを
うつゝねとし人の心のおもひにはなれたるにはおもてけの人さま也
まかやうに人をまきつのあさましかり物思霊ふかく有し
せんさいとし　験者し
御まひはらへかしことも　源のきんも御事こそと大臣の名
行幸ありくとの御かたり
御息所二条の君　秘 葵上の御おもき病を人はたしてかく

うらみんめし　弄曰
あけてさへ　うらみのひとつの御むね給ふ
としきかれぬれと　自然葵上の御めのとあらかにに恨給
ねをそさき　とらぬみの異おやなと云也
おやのうらせ　又九条左大臣たまひつゝ邪気なといひ
てさふねりのていのもまくいおはし
むねくしかうねて　持としかうぬしよしてなきまを云し
きゝつゝと御前の　花 物のけの御祈し　弄曰
葵の御祈しそのけのたえさし
惑ひも　弄 秘 桐壺帝し
わしきたりへのため　葵の事しまつひはなりつきて威勢の
ころゆかりいよくわしき命とし
御息所はかりは人めてなりし　秘 異はなりのみてより
葵上をおもしむをそれてまとて付もむ心のそてくるし
かの御まはさるなた　人のうしろへきかとみゆるむあり
きこえし　弄曰　あつては御門の方に六条宮の方の恨わるとは

すくさ遊ひしつゝやつれ所々つゝましとし
かく御もの思ひもそふらるれは　も　是は御息所の御心にてまいらせさらはあ
てもの文は榊の巻にかくさなれはあまりてかくて此わかことしるし
は　大将ははゆるしたるいとまよりてかくて院はおこなひ給ふし
おかしうして　やうしと思ふ立后　御息所例なりぬと
源の見んまいりなりたり　御息所うりたらつまて院はよせまいらせを
まいりつぬひ給　いふ六条前坊の御宮にハ桐壺の中すまてゐらせ給人は前よ
源のおいしさ此て　榊の巻うりにをつけて心やすくも
為御はしましぬよしありし
源とゆるされ給へく　源のゆかりの女人の恨をも思ひ給
経てと葉にゝ給へ哥さ給し
なやましき人の　如　葵上此事　源の方ゆかりいひあつかふし
これかりうりしを　源の御初し気はさかりと思ひ給しも父母共お
きとそろかりていひかしのすし御息所をもうく思ひてよ源の言し
如　見奉らさんとてなんれをきらうてつねへし

おかしくゐなくり　只今此程をとくへあかんさまを恨給ハね
やうかて御息所へうちつけひなみて
つまりりもんくうしまかう　是よりも御息所さ思と云源の心
うらとけぬ御わかりけ　も　御息所よりあかあかしさし　如日
大中源と御息所へのさ思し
好色数有けさ思しうらとけぬとは内にそてぬやされの心
是にしたよはつかくうらとけぬ御ゆかしく立りありきさ思し
うかゝれなん事ハ　如　御息所の心
居んてくのさきしたに　如　葵此懐妊の事御息所の事し
うらやましけりきこへ　此程をしまいらせなかりしこと
ひこまゐり
文なりけを　源と御かたへ少し今月は源のおかせねし
月ころもらしおこてさる思　如　源の文此初し
葵上のまつりひなよし
まいのことつけ　如　いろりのかこつきすとなるかまて
六条御息所
御わかうて立后をしけ　ま御息所の心わかうしく思いかれらいつもうくさ
も　立后は源をいかにとしてつまはきさんる初しさて御わたりまして立后

田子ていふハしきなくし早苗なとうつしてゐ中にわかちいつちとよみとなと
異
爾乃家多をとらへ給し
以下のことにまかりしきゆゑあり
如
此物語勇一の多くんハさて家多かれぬをひとし
山の井のいとてかりかけて　此集は丸文の詞し
白
悔しくそ今はみおそまる波かれハ袖のとぬれ山の井の水
を
山の井のあハあさき契のいくし涙のいかりしけあさきりてたり
なかりとはげ集亦の述懐しけるて
如
此ハみさし海来也なり
御子ハなほいらの人の中ヨ　六左集亦ま往しまし
如
いつしまてて後てきんと分り　異原の中しる蔵し
いうまえやあるせる
以
らやうにいつても多くひさん人の御おあもへき舟なきまんかと
こまうにせれ中なりとし
私云涙の田子かうちてものとこしくにまつつきりすなきし
むつまもなきしらいまぬとおりへいふ今るさころあかりしとなと

いうまゑやあるせるてほとなんさつやにはうつねを釈しまの詞ゆかし
袖のとぬれてやいふハぬれてらぬ事まかん
山の井のあかとわる詞よしやうり此事へとそしハ伊勢物語よ
みのをうさとこうあらん本うにめれてなとりやまそと
りつきし
私云袖のとぬれてやいふハとうみて句をきらてうるへし
さてうららぬとハ古詮源への法んさしうらぬなとと
ありまねふとはみるよらひのへてら
以
あさみこそやハおりこ川家かさハ身もそらかけまてうかき添給と
如
賤者の乔とし身もそらかり本ある流いて今らかりハ心浅く深くて
を
その苗とて田子ハ深中のあさきなるおそくかり此し身もそかり
またハ山田のそうけをぬかりしかしふあるをハ身をひさつつり
のみちとよみ作り田詞しつひおほく作り
やのまかさまハ袖ぬれてとあかり家ハ袖つりにハあの身ぬれてき
されと詞まてふうらぬけうするのんとハいそかう山田のそうけて

いつかも一つかゆかり　これハ伊勢物語り
つれ〳〵となかめくらすに波門神のといかにてゆうようかとしな
みて　女よういりて　業平のよみける
あさみしとて神ちいつの波門身さへ斯かりしきかハゆ知らん
此歌業平の哥也
此歌にて心をうつしきこえさせぬとあり　弄　うつりにかりてた
心をさとりたまつすとおもとけりとおもひとおもかへす人さ
つとうになけかしなれけること
〻源氏はそのすの初しこそれす　なるハ口にて糸して中へきを
なきまして葵上のよし　ひしか所をと推量されてきすとし
大殿よハあねのけいろうたこう
息所へ源氏のなきなし今は息所ハ待ち　葵のつらく思ふつい給ひ御
いふよし葵のうらへのほとかよしいてつきにし　源のおいつを
此はいはもてこるらかおはして給らうき　河　大殿の父太政の
とも息所の父大臣の御怨霊といてし　弄　此はいわきもとなせといふ息所
所の息所の父大臣の霊とかくうきりむし

〻河海にやまわうちる流された御息所のとまひうまいて父
左大臣の霊になりてまるる
きこゆるをかてかりしつけれハ　〻さすやとおもかをいりを
御息所のやらの所にとてそつけ給ひて
身ひとつのうきことまれ　〻御息所の心けまし
親身のよのとるけきく人をおとしまてとの心にねとし
物思ふことよなるかにとしるハ　もとよりかたはの御事とてうし
かくしもうけめを　思とくとし
まゐりまうけ　車のあらそひの遺恨なりとおもひれしうき
〻さんのまゐりかねて
すこしうちまとろむ　あるまさやとおもひして給ふ　事も
ありといふハこれかの事
むかしのまとろみをすつけハしやうれ葉のかうとし　非君ハ葵
〻いつめつまし　御息所の夢にみえ
河　ならくいふ
猛霊とひとつのとハひとやさかとふるらへみちて物をなし
外出仙霊魂与鬼通　世といふハそれしをあ三ヲり

まよ男をとらへてや　弄　秋山川ぞあり
向　男をすてゝいやしにせん家男よりおなじ扱いならまり
らうしんなれ　家男の妹のやしなひなりき
いひ出し侍るへき女より　家きんうのおもせいへのしかいといふ
とおかりけなり
いそかしかり　む　名のりけへき事し
松　名のりけりし
ひとしきり世もなく　松　死霊いつ〇よあるの事とし
もろくつまとなき女　や　深しからぬ事のおそろしく
深まりあれて仕るまでしとぞて
おのれてみなあり　弄　秋の月川ぞし
は　おもといふとおもふてみなとさらへなりあはしくなかりしや　書
む　面白くいきうき毛まさく此是正の人巾なる
女家はいふそ円へ入のつくろうしと　弄　陰なる入すりんなし　女月
向　うちは入すふとは陰用まで入すの九月は神文入みの女事し
延喜式云　凡奴王入太神之時自九月一日至廿月

む　大内のうらまたのつたさまは入ゆくへきといひていまをの
家おりきうし由もとし
廿秋いつ秋　是は陰日へ入ゆるなし
咄家まうけろひ　陰日より望んで家へ始りのうへき事し
二まひの御たゝん　む　女家陰日に入りんして又咄家よ
大阪りんして東門まで夜殿のうちは是を二まひの床をへんと云し
但拝所の時は夜殿は西門からくるもし
女　むきまみそくろう　新月
かけくしらうて　此是正の神し　老　メ字し
家人いうしきたりす（タイと）　拙好の家へて女家の月の人かなん
是れは神道の形なる人し
歯さうるいそう　松　葵上の事し深の夜回さしれのうき葵
上のまつとまつひてあのしおもて遣は夜回さし此おもうなる陣
是宗のみことそうとるさ行くのまつひとは形をそれこなりと
まさまかつき　葵の夜屋の事し
大ぬをきこゑつき　松　葵上の源へ御の能りんとし

まいの上ハ物まいり　御息所の霊なるへし
いろしらてうちされく　源氏ハ物の気の調伏せしめ給ふへし
ゆく人ありへや　物の気ハいちはやし
葵上のなやみなり
されたりよめいやかわらん　源氏そこにいのりせしめ給ふく
物のけハとりつくへきものありやなと皆らるて
いきいりてまつりたまふ　源の葵の上を入おりしたまふし
むけまう行りれ　葵の神し
きこえおりましき　如 葵の造るるをへきうとふって
おとくも意も　葵ハ父大臣と母宮し源へ物の怪をうち払(?)
用捨よそありたきはかし
うら侍り新当め〳〵法花経をよみ
ゆく人ありとみりし　かおくとや危く法花経をよむへかり
法花経放逸天皇之二年漢本組之羅什之翻譯之
みてきつり給へを　源の奏神みるって
よゐ人ある　他人あらそはさる事とこそりしよへし

ましてて源の心中ほとなり
あろき方るに　如 産婦のおもちし
ちちみ入まるを　髪をつゆひく法そふかへたるし
うつてしれてちらさけまく　如 葵上のうちうちとけたるあり
さ夜をいそうしめくみのうて
御くまとえへく　葵の法まと源のとうし
なき給へて　源し
まいいるもまりくたつうしけある　物の気のなくもる
夜よ葵の常世心のくるしにかりくうるさ細し
なからし心こそる　葵上ハ其のなかりりて源を
うらまりうあらそきとらわそし
見あつ　此葵のさ甲を源の見給心中をうちみゆへし
おまういもうなき給へて　秋 葵上死し
いかろしきおやさう　源の心し
うくみ給へり　秋 源とつみするほけなくし
何事もいたう　源の別をしうかなかせしとはさうしてこと

まうてきしめりんとなすきあ給ひしきハ葵の中将つく事をうつく
なかんするとうへしくうちすと源ハおほしてのゆうて
よまれ給ひせ　も秘度世よそて夫婦の今ハりそしまうしき
秘云いうまうことハおほまきし（うハおかりもしとけうこれ
いしうかん給しきりんとこて又いうまりともいて又めうるいら
こまちうかくなりけれまそりいくめくしとしゆうや
おとくまうしうつまてきへ　私親子の契いハ一世とえひすうけ
めれいとかいなくさめくの　のふし　升日
いくおうもや　私葵上の御こ方自ら床の契の入うりつてこし
源のあらわれのしすくさやうれかすりてハなしといって
男のうへれつしくうしまと　源へ契のいまそら御し
とうしまうこえしし　おすき思ひ心叶とのきうれう
もうしとお遠かきかとさし
物思ふ人の身の　ゆかハ
物おもへてきみの言葉也　なき男よりおもくれおう事しそうう　宗祇式部
秘云此哥の後拾遺集羽云　男ヲ忘られて後にまうのね

まいりてみそし川まて言れとひゆうるやとそてしあうこし
物山よ多きうて落ちる滝はやの声うるいうう物をおもひそ
此哥いきてかのの御物の作れ物うし男れ忽かつて宗祇式部の年
よやうへのうてなん、いひつくへよう　こし
なりしけよ　物思その源子あけうしまよいかてし
あけさまひ分すとそてわうあるとひとむくめよ下うひのはよ
哥あまり物ふしあれさうもん夜ふつてみてハあいむきやひせよあハ
こ河めしハ祈さ志うねしともいそあよかうひのつまを後の
哥ハ古俊太后の御文の哥とし　あれあゆうへと源のこともしうすあれ
給ひをあすくいらうそへくとおかよ思ひしまそてそうこ恨みし
その人すてあれ　常に葵のつま思ひまハあしれやすてこ御子の
さ曹ま　何そうと源のおかしおけれなり　宗祇の御の吉よいそくあつうこと
あさまし人のこく
のいふやといるうともさ後のまいきてとひるしまてよりや
たらうとつかくもおくね　とあさましく源のなかもそこ
かくの恨へと　源の物たうしまうすして此給御し

かくされなる　保元平治の乱に似たるし
人々ちかうよりて　人のうちやまふめんと涙のたまふみりけり
此程も去年まり　葵の御子のあやしやうなれたる
おつしまうしたなり
御まおいまうしやや　此病のをききといひて
此ゆりくらせ　栄花物語に一条院の母后東三条院の
きのふる事とひろまいていせまくたゆとま
きこしめされとくをたゆとハおもゆし
祖するむまれ給ね　夕霧の誕生し
人まうらうし　人は見と所とらうしさらしたの
りまれぬつるとおのけとりの様うむとし
うちの事　産の接の事ともなかくし　寿
かいちりよてまり　主郎すらのちうしに接の事し
年安なりなりうたなり
山のざす　義真和尚天長元年六月廿二日始補天台座
主号修禅大師

けうまもとおかりとて　葵もちやおのなるあやしと皆人の付し
まけいむまうあるめつしき　誕生の具あうめつしきは
こゝる人々をと通ゆるり　夕霧は源の衣さとそのかりけ
のけなし諸若宮それハ様義一限と具しかしつきまうとし
これ人ゆるり　誕生の事とうみなしして葵の事は
ちとほ部のあるなり
院をかしらん　桐壺帝以下みうの中しなんとゆう
らみゆしきの夜にに　接三やとナケ左伝再二
三ケ夜五ケ夜七夜の事なりや　曰
礼記内則篇云国君世子生告于君接以大牢　注云読接為捷
而訓為勝其母廷鄭氏謂食其母使補虚強気也　左伝桓公
六年傳曰九月丁卯子同生太子生之礼挙之接以大牢
婦人産後の空虚を補ふて
男子くきいおつまれハ　こそまて男子にてとりれしまかち
うらいりておのしうし
かのうやまうちうはわかうまゆき　葵うるるとたいまちかる

御心のうちなり　抄 みなおなしこと〳〵きけてあらまほしく
めしきこえ給はぬ恋しとおほさる　此ことは日頃の事也
とかくありしかは　葵うへたには誕生まつまで御身のほとりにあら
ぬ事は葵の身にいらぬとて恋しく　若君なりとも後を慰めしめ
ありたきに　心をとまりていよ〳〵御くるしさのほかも
またなれはりてつくはれぬ大かたならすはとてまたなりへし
少年病気のすこしもすまさく葵の上なりなるかなら紫の上の事を
案じ病中なれは偏にしるを葵のなかにし
ありてしつまかへし給　夕霧を源のありてしつれ
世とあひさう　左大臣威勢ある上の源をもにまと若君さへ
おきなからましにともおほしてとてあひさるをいとし
左大臣の事さらにもみつかされは盈高を如く理ふく
葵上の迎のすむ事さるなるへし　此御語はいつくも此をと思ひなし
たくこれなんち　葵
きりつのいちうし　抄 大宮の冥気又産らの名を

きこし平金なれりきと　此絵ちらし御前のつゐし
わつ男のたちまちのりし　抄 夕霧の冷泉の例にまかせ
まう恋しう　夕霧のまま冷泉よ似給つるよりまつ恐悲て
身つからつかふへし　但此まの羽よ御すとに身つていとやう
御そてさんとあつされは髪宮のまと見つらくのまへるにつき
てもん夜つかれ中名と恋しくおもひおのつと少くまり
うちなからにてあまりなるへしう　これは源の御内にまへ身つ
給りんとくく葵のそそくへおりして　の給羽し
うあてなら　抄 身内ありし立しくありきにかね御へよりく
の給命う
けよんみひとんまえんまれをわるへきつつまて命し　給つる所なり
まとたつぬをとはくおところへまてりともみつし御心に人つき
イ本こ此羽入こく出入来までむしてある
此巻男まとすて賊むる羽のまさるは奥なにしも表紙には此羽
あつ見は葵のうとくりうまうつねをのいふ羽しえんまのとまへきつ
いとは給へるひさるさねつうとみて給りん中中すもあり候とゆし

葵ハ病中なれハとかくうち〳〵なり
今めかしきさまもし　私 葵ニ對面なし
源の下心内へ入ても見むけなるハ葵ニ面なり
されともしけるなき人と　より〳〵となるさ御あつかひつらさと恨し
御心のうちのさけしれぬ　ト 私 邪氣の時護摩ニ芥子
をとこなるあつきをも邪氣をさる所とて　ことにかくしおもひなしきをまへし
私 護摩ニハ芥子にて是ヲ焼なり衣裳ニしみつき
猶かほりまさりて
ト 髪あらひすとて　私 髪あらひ也
式云 沐浴史記沐ノ字上ニスル下読り
私云 沐ハ髪あらひ 浴ハゆあみ也
いとめつらしきも　必 ことわりなれハなるへし
私云 つれなきもハかやうなるあいさつなるへしとにいふ
ことひともなひなくなれハまことおほしなけかれける
人しれぬ御心のうちになつかしさのかれさるへし
とりすくる　私 葵上ハ霊の入りたるをさらしなすへし
かく人まかへ　此息所へ久しく音信もなしおほやうこれそいんと

そなたの源の心ならしましけれ
けちかく　對面もすけなしなとハいかやうにうちそきうくへき事
御心のけはひおほかし　時の事源の心はとられたまひて
人の心くるしかるへし　私 源 御心 事
私云 只今源のなさけなとに御息所へ音信あらハおほ心けの事一定
と人のさたあらんすきとも人のたかひいてはしく源のおかれをし
み私云 人の心をもいひてはしうら對面ありてさても御心のけは
あらはれのかすまりてのち花なる御はんハ御息所の御心
心をいひとはしきのうちなれハうるさくおもひしても入けりと
さてまうてのことかやう大臣世上ニ云さかいことも御息所の事ハ
心なれ源の心のけうつおもひたまんにことも御心ハにいてはしきと云ふ
つし此御息所の心の葉にたる御様にて心をも御人まきれ也
いとさまうけひのまへ人の名たち　此段葵の上等といふのいつかれ
給ひても御息おひの名ふれハさけ母宮いまさし御あるきの事
なれとも源氏いつもいつてあつまりし　給ハすこし
たゝやむしけまかりしまへハまさいのさたもそこ

いまもなくしらぬ　葵の上のうせたまひし時御息所の事を思ひやらせ給ひて
後は源におもひとられ給ひし御息所の事を思ひやられし
まさにいとゞ名残けに　源のわりなき事にまかせ給へと
おもしろく思ひけるなるべし
此ゆへにこれなと　松　源のたまひし御息所の事はいかでかしの事をしたひて
いはれじけなり　先よりか葵の病中のさまを見てと云し
うちものしき也　細　年ころうちとけしけしと源の後悔し給て
不定もあるまじく　中将なる御息所のうへへ源のやいひかなふ
の葵のなくなるべきおもむき源のうちに思ひける
源よりさきにいひて　松　源の御葵へいとゞうらみしひしいみし
おりかふれ　此段は深く道理にかなふ也
宮の御なげきとおかふする　細　母宮も母宮の立かへりにはいかにもおはしまさず
源のしらぬ人御心えまかりぬへし
らしちなくやと　京極實なりけりと
さいのおもいしかえよりて　松　ひとへによみきるへし
あまりかく　母宮の事をあまりにかなしき人のやうにおほし

給ふと云しされて法華をきゝしと下殿もなきとのりしき
いのちなりし所へ源とひみ身のほかへ方なるへし
太宰の葵をおきなかき人のやかにしあひする所ゆへさまたけ
てうへのみなとかはらしれてあかなり
つゐにかへらぬ人となれは　細　葵の源を同じく思しめすと
弄　葵の源氏を又こ給ましき先表し
宮大葵の死別のちらくなりて名をおしくおもふみなとへし
秋のつきめし　細　八月し　葵の除目と県召と云秋と京官
と云し春はもしまと外官を任せて除外官のみ守分国除目
よありて県召と云し京官とは京にある諸司を也
と任せて侍るとつきめしとは外官の諸司也と云く任官
なと秋の諸々を云しとて云し　隆円天武天皇四年三月始也
大臣と云ふ　左大臣一ノ上也　諸の内諸の司なる人来れは除目
なと此人のあらひなるへし　但當代が威也それと右大臣
まさに此をとうたてあるへし
居ながら　弄　花散里の長らくよ　私云源氏の御人のつきたれは

いつかりのたるそ　又人とつきれふるとよもし
此歌宮への　秋風いつたりのこゝちは此由に命あれんの人と
歌としてのこゝろしらせらへし
こゝのひきつきて　つまさふらはれまつらう
表あやかすの後に　御ありれ後に物のこゝれとう入さるし
うらにふせうとこ　内裏にたえたれおいすゝ人と中ゆよ
その後のすく蔡れさと入のうし
あしとみつあく　足れふゝなとおかしく中にあうやれ口れ
こゝとやられさゝ　又はすてうりさ舟しらつさくし
山のさそなふくれ　おりふし論あるとさりあぬこ
物かてあるう
此詞栄花物語にもあり　桂人ゝととゞも行あるし
えきこゝ人かりと　唐は心しきさ日し
さひしとうい道　えや決さるし中ちうは銘閑さ日なる
御枕ありしもさるう　物のけれ御こゝろにもかくさん入のとし
のけれのやれ事志まうもしまう　又横笛は御なりやし枕なと

あつためもしてなきすこし枕とる道は横笛をたぬかけり
秋夕鏡泰孝御院の百ヶ勘へし
彼かねへかし宿すそ中にしれうちいとめてゝくれかり
ましきうちしうつきはめさゝらんそめてかいもろれなく
なかまたいつへてもおりいひさりまれは母上すかおろゝや
うしとの道志すかねともそうてまいのやうにせさせ給なさい
ほ花浄論しなまんの本云と此れ必論りまうそてくへしと
れぬく方便なとよこなりあひくそうせれんるその遺言を
母小方去道にいつへきはあう孫とおとしえくおいしるけれ
ふを人への者とてまうおうしや枕人へしすてやとまいのやう
なるあうさ日とも伝してされはえくうはいすあやくるる後母
小方れ古家すえし給つう尤いろ其日もし物とまるうつるる
程まは変るゝへしやいとて後はいかいは梅花えしまんな
おいう給　　横笛あるまうしきは母の見ゆるし
おりしきる花　　ときまくは数さるうともれの日わもし　しあや
とられ口とおしきろうまさとるへき事し

ゑりきるまゝて浮きへて世中をいとうき物り
少々のしきるすに蓍し世中れうきハ後の清信さう浮舟ハまさる
かやられつとてもいてとさめる　ね云ゑりきる事ハ蓍る氷もさ
世中のいとうきハ世の字まあそいれまし人のるを見
をしるく人の四しくおかさるとしまやけまの弱まく
すらぬきあそうれさうのいとをしとあれハ見ハ思ひ西ハ悲
あらられまめへしを发おの字にあそいれの人をなく
ていとうしくおかもとかんとうりかす
壊まあかしまけさ　桐壷帝し
おゆるしけかる
うましきをを　西月らしきし
ゆまつきそを後ハいまるしとしやるやへし　左右の悲の中をかけたけるまをかて
いきやうろのうて　せ人の中まうにいきやうる絹とさゐく
れすそし浮あひさる桐ぬのゝうりもとし
そうへのま　蓍れ逝去八月十四日の夜し葬送ハ十五日余し
いとけなりとそもたありし

葬送まつもてあられなるまいれかきし云ゐしう面白し
壊をいさ下をいうれきさいの文まを云
桐壷洋門前つかれ中宮冷泉院まをし　弄ましとつすと円仍れ
わこまのてともうすき洌と
ゆき服をまやうし立とあるぬし
文選第二郭璞江賦神蜧蝹蜦以沉游注ニ神蜧ハ蛇也蝹蜦ハ行貌也
又日本紀第二豊玉姫化為八尋大熊鰐匍匐逶蛇何事ヲ
うかありしし弄　万葉モユヨフハ夕ヘヨヒアリ多日ヒ以ムニテ丢了須れ
文選ノ義　永正七三ノ之　日本紀ハ文選とる　永正八九ノ之とし
ね云澄明の子にとられくまの形見の弱あり動くへし
葬送の夜し
ちくもそろ
いとをろなき清うらき　骨を遣れの夜し　あられはまの世り
つれのてともれと　葬送するの夜ハろれそるあらすし
きれと浮ハうやられすきう浮いねし
人むうろのおまそしと　人ひとうり丸ちう
ね人ひとうりハ夕息上をいふてし　弄月

あまくしくみなりぬ　かれまは源のかれ給ひなぬ先
しやかしてかなし抱し
八月廿日あまりのみな明なれは空のけしきも
あはれなるに大将殿しは父子もたれあし同けに哀なん
月のすさみかし給ふあり　弄ノ月
少年夕負葵上の弔はれ八月ついしも世にて
おもしれやとまれれましひなりつ　八月大余日あり明なれ
若君の子とおもふ石のやうは晴かくしとまや又たとみ人し
（源）それこなたりめりれ　源氏さ申しあはれ月の影ささりすし
のかりめるたかつはれれとも見れも無くなくをみれ哀かりくる
（弄）我あらは葬送のみち車のうちにて源し給ひ給ひし次のすか
しつまくしとかり
露まきくれぬり給ふ　源し
こしろのちあり申を　源の葵の上とつくとぞ
かとて佐年は　女年さ此うしとの首まさは法るは
くるとさうへなとしのかなとし

世をへくうしとくさうしき　葵のつまとも源の今ならなけし
まなめ給ひ　本書の服のなのうちまし服し　弄日
少去ひ名の中くらぬかり　源の口し家かさまくらのかわらは
まれさきさてましらは
葵上ハ年服まくあくへま為とし　少此羽ありしろくうきとめた
あくとをあましとおかをさへ
見しおかとさんあくれゆくといふかといしのこしたら文しうへ
うきてかくそ深ましとたかとさんへきらかれはらす景哀
といひうけらる面白しうきらかれつと年服將服のかは
つとめは令のさくのあるすし
（源）かきりあれはうち景衣あさくれと源を袖とふちとなりけり
（本）限あるとは服忌令なとの定あれはさのとふくもそあらし
（弄）名のかたりあれはさのとあくとそあれと此か極に月
私服のふうきを制とさもといふてさて景衣よりも羽を
着と制小あしらは例此為法と勝月東と續参のあり
あるかはさんちかはふかきん大し

法界三昧ハ普賢菩薩の徳也天台五仏頂悔云南無法界三
昧普賢相又大唐西院和尚礼讃ノ詞ニモ法界三昧普賢菩薩
文句云大論ニ稱菩薩為大士亦云開士也 傳教作 ミ

普賢ハ法界にあらゆる衆生を三昧にて観音ハ慈悲にと三昧を説
給ふてし文七手一處合為普賢延命大菩薩埵 秋日
法師にうたせけり 旧 勝しまりをすりて人数にうたせけり
皆付字にかくし又云思し又思し 万葉
私云 法師にうたせまりけり

弄 後撰にあつかとしてしのふ奇し 河ニ引ノ
なみこその
旧 むかしはかくこそありけん世ハ何よきのみのなをつまし
おしまいかりておもひなくよし 源氏夕霧をとりてせかて給
さみすて此後世に一首の詞かくりまら
如 無言にし
家いまたにいりく
けりさけいそき 或抄中将のすさ 只仏事也
如 此類ハ疑ふかれ源ぶ文のこすりしをうかけさるすおす也へし

凡此物語ハ盛ふる必要の理を悉皆あつかせり 葵上ハ夕霧を
誕生ありて十ふかりしきたに此すの物の怪と云ふ七日の中にす也へし
なのめなる事をかなり 葵のうさと云は源氏評して云り
みなうしおかりせね 如 女子の見舟なり事し
神のうへのおきてけさりきん
或抄云古形文ノ句ミ 弾掌上ミ 環權心冊 伊行尺
業ミ 神上し 珊瑚とらるわり 奥入云 琳本文ミ
弄 本文不分明可尋又切なりんものへし
必 何かひなきをいふしなみ所ぶ的 私云ゟ雲林院 法名常植
ひとつ子をとられて殺の々と母ひつかりをる云の中に二道進
なくひとて源ぶすなる此神の上の出くるけるきんなとそうし 阿
さるものの此詞をとも
二条院にもまかりさ母ふを 源の二条院へまへおりせすまとし
まことに彼人ハやくおりせぬし
而ゟには 故のいかにさなりへし
其家はまの本院の所にさに入給ふかれ

旧
女王三人女ノ間ト定メテ侍月ヘ入給ひし人ある時ハ其来
精進此小精進以東廳座にてあり女房入内侍併兼
日上臈陣ノ令勘仲後日時并　定申参議以及蔵人奏聞又
式服上ノ年次月被進扇五位蔵人為勅使次第五位蔵人兼
日奉作令夜上人調之次第五位蔵人催遣二三車牛并門侍
典侍蔵人参議也次入仲秋宮一如入仲読月催之

八月ニ侍月入給ひきし去年中ニ大内の侍月へ入給ひきと延引
ありと定したまつのつゆ人の袖ニみちこれしもちや
まくるゝ人きしたまつのつゆきハ精進し
いつゝき侍さしまいり
旧　蔵守氏業安
日　女　いよいよ潔斎なるにつけてもまいるなり
侍月ニ入のまくハいよいよ待ける蔵年まちへて今傍ハ夢也悲
眼なれハかれともなかなしらくにくも身恋へ寄るし
うしとおもひ出みれ　松宗うしとおもふまさこそ身にしハ文
常陀法住さりまつすたしとまうへしかれよけ夢の事し

世をなくへいかりしくとハ秋のなかめのすゑを見給ひて
人の世ハうら紀氏ことゝりけきぬれてこそきるかなるへし
うらかなし
松不及川寺氏　女　夕霧代事し
信つしきさ向　生家あるてみそらこときのかさへし
まつくさいめひめ寡　女　寡止し
ゆかしきてなし給かんとハ此経二条院へてなつかしき
よるハ夜丁氏らる　源のさ面し参とてすま侍のなし方也
こゝのの人々とハ　女房達し
ちかうめくりて　夜丁のかくつきし
時しをあれと　旧　ときてしをあれ秋やハ人のまことへつき
あやなきこと空しきゆと
さらハよをしまかれつゝせしを　昇秋川与円
式部卿宮さらハ夜宮をすまゝなしよめのとをうたにて月見へきに
えりさつりせるふ念仏の　女　二かりある信し
旧　常行三昧　川教二二仏経陀を補ひるし
よるき秋のあされ　女　川宗ニ度へうつをおもしろき詞し

身にしみける風と
河 古今秋上
吹よれハ身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな　紀友則
弄
吹よれハ身にもしみけるといへるのこゝろにてかくいひて　表なるらんやうなる
しるへき　身にしみて秋のさ夜の色よろしく見えたるあり
かゝへの夏にみえつるをも気近く見えたるや
わかしかは胡かんけれ身にしみ思ひけれ思ひつれ心やられんつれれ
是非ハいたくましてかへと見えたり
菊の色しきたる
弄
ひつけさしかる様なるへし
少年用かるかるし　　如ハまさにひつけさるなとなり
これおほえて
弄
花田にきよけれましきかし服なれ方への紙のなかるへし　菊と同なるへし
河
花田のこきさし菊の色の文にかなふなるへし
菊の枝にハ白き文をつくし紫の紙にそへてあへきれなといます
ひらけされハあるまいの紙に作く寄し紫の色し

さしときこゆ　　式抄云此事源氏の心のうちにかゝれやくて
た脱といつく源の心なきさしかきさるにやかきさ此四字は見し
いまめかしうもなく　　何ともいひそなきことを思ひなる方か
よの文のやうにそえして、いまめかしくてよの源氏のめかる詞
きこえぬかとハ　　弄 文詞　　　まや
六帖集 花　人の名をきハさかまつさのまさんやうかれハきこえねとし　如日
人の母とおもはれてきゝても露けきさそ問ゝ袖とおもひてや
如　人のうへと見てて独身ておもし事とて思ふ屋に見て何よれは身し
弄
菊まこゝなり　如日　　私云恭への事と此是事の公衆たるまに見て
も露けきは源の袖の上思やら問とかの色のめす
いまの色は思ふかまりて　　松　こまやかなる文の詞し
弄
同のかりをいひてとおもふまつひのなてもしかなり何事にかあらん
式抄云なくぬかりていふハ無下の心にまかせていかゝ　なとこゝろね
と云文の詞しさて源のれうこゝよりもさしへはかりしきるなんとこれ
ハ此義て紀かさと　文弄 一本ニ　源氏此思ひ心へ此様ハよろしまさならと
く事あるやうもいひてかけしてかくへしきかしうなれ

とあり　花宴の巻ハ別なりけり
つらうせしに　生ける身を捨てゝは
つれなの心とつらひ　今ハ此世にあらしとおもふハ心うきうきさけ
まことに我身の見てとかく思ハぬおきてもとし
つきなのとハ我身のあまりにおほえんの女をんかしてハとを
ひなへる事なり
きうもてうきとく　＊源の君　是より御息所への源氏さい
といひ給ひてきこえんと分にいふまでなり
人の御名のうちのへき　御息所をさして源氏の後まての御
うきよおもしろき御定そ人のあうへきことされハ我名のいまの
見へしやへハともかくてを　＊葵上定業まてもなきを つかはし
きさくもと　きことをし物のけよめつけし
出る御心ハ　とせめていはれはしもそうし身しくハ我が
見へうれまことにも一つ所かさねなとしまかれやつね
源の心より見ておかしなくともあらしくも女きさしと女知給へ
いまにかハ一所の後のかなりなるして　様不
女房のたまふまけり

とう女をまかりてまもりしと源の御あつかひまふなり
わきとれぬ　＊わきて哀れめとおほすなていい
むらさきのゆかりめて給　ほ岩風まくてまひ夏かうしひまるし
＊右四よありものへうるなしゆかりのハ何も　服きぬ用ゐるし
日まもあらハうつろふるしまひ候し
六よなりつへ侍よけらく　＊源氏又御たし此顔をしもさき
日ものうことしこにすみきハてのやつへてうとし
つましきかもい　源の御服のすし
＊様不なるまよりて　舞歌をかなし
もつましき八方りいてきんし見よりとやくちうくめ
れと物意うくを後へきとおもいつくて呼ひみりし
御かハおかしきりけん　松色ハ女息所の御よきこえぬ様は
定ありうんとあるとうけくそれやうもさやうなりハ右
見へしとおかしきれといふ親しつましき程ハ源の服をかし
御かハ女息所より御羽も袖の色まされもいささかなと云る
ともくに飛くの御　も秘の巻ハ君別し

添 とまる身も消しもおなし露の世に心おくらんほとそはかなき

如 世すてれ無常を云り

寿 心おくらんとは此身されたのもしすてにかなしきをのあはれ 如月

　私云 かりそめには世をすてれありき消ハ消しをもとすてゝ露の

　身すれハ蓁にすてゝをこらて思ひかけてなるき事と

　いふし下れ人ハ此身の別れけすとハわかれ捨ての

　いたる事とふくませらる所なし

おかしきらくよろし

同 此歌のひとうらくと思ひなへとあるハ

作すまれハ様本歌をいしくも此歌せしとうけるなり

も 何すもあさなる世まさのと思しいうらくいふぬのまり

入作の事をかのめしくる初し

如 何すも世まゝまんるすくの歌ひくそうらんと詠とあし

きまよとふあと歌を叢所の心なり

はらんせんやとあそり

は 作すまれハ様本歌ハよまさらんせしとうさうなり　同門本作すると

も 女房のおきてよまつりの初めしすれハ様本歌ハよしも此歌んせし

寿

それそての事へしと云人て

服をみ方うりれ文すれても此歌んをねるまもやとそ此文すて

如心とうれはくさねよりしうこつけら初かくへし

如 同門本作すうとあり此句と御を表紙まハこれ

ともハ此本歌の詞まやての後ハおかしきうのんやとあるへきとうけそ

見まをもと見るへしこゝろさしておかしくんて

添 此文の詞まさらいたかしきらのんとそてと云此詞の未し

私云 何まて 様本歌のすとうらへきん

さらにおかしそう　此本歌此冒さし

志のひてみれく　何まて初すて様の文をハ作すとにうらうしかう

かのあらし後る　如 まへの作ハおかしきそてよとしの初此事し

何のおかて　は かつおやまなりうる事をへやとつらんとおもろう

くるふんて見とハおそろしき事をいひて

私心まかしはりやれてとひおくうなり

されたよと　如 見る景まおくるすハ実なりとめとこる寂し

折いとくたりなき　作亭所の人あり多以うへ上とにわくよ

おもひつきのふなり
院ともいふ　桐壷帝なり
こせんだいわたらしきけふかりと　前坊ハ桐壷帝の弟
彼の兄弟なれば御父を御いとの御ためにハ御めいにておハし
ましけるとて内侍のかみとハ御息所と御弟の帝の御時の事也
（早）桐壷と前坊とハ御兄弟なりけり　此御事にてこそ
その御かハりまりと　（出）前坊の御かハりにて御ことのはにおほやけ
しりて内侍のかみへと移りたるに御中絶ありて　身を憂き
の事なれバけしからぬかくてありて前ハさるしとて
やかて内をみ　前坊ハ春宮にしなくなられて物ぞ前坊と申し
春宮坊ハ大内にあれてやがて内をみとらかし御息所の六条
京極の家にかへりしハちておはしけれバ里亭へ退出の事し
ひとりかりにまかりし　（如）此源のうちにあるさうらうし
まいのさまかとし　御息所はなれもしかりぬし
松をかのけまうでて物のみやかれなるまつけてのこと
ゆかしきにかきし

さるハ　御息所とさしたるさるさかしきまりしれといふ神也
前坊の名ハいつ　（如）ようしかうとしうかふ
（斉）此女の御かうけりといひ　（同）口京のあはれまし
後すはより野宮へ入りたまふ　（秘日）
延喜式云凡斎内親王定卜即卜定内使為初斎院祓禊
而入至明年七月祓於此院更卜城外浄野造野宮年八月
上旬卜定吉日臨河祓禊即野宮自遷入日至明年八月斎於
此宮九月上旬卜定吉日臨河祓禊参入伊勢斎宮
今案斎宮はあまて三年の内野宮にて上京の御禊
ありて初斎院へ入り給ひて其年の明年野宮へ入給ひとて
又あくる年伊勢へくだり給ひとて次禊ありて野宮の御
うつろひハ二年めの八月のころ
猶上人ハ　わりなき人とものいひもとしかし
物あはれなりけりかくを　此女の御心さまめ面白くなよびたるや
くちをしとハ此御の心ちして様ならんし

きゝなれても　私 此御息所は太后よりかはる人まて人の上也

なからへしを源のきこしめすへし

ことわりなるへし　私 人々と源の御ありさまとて

世中はめてたき　内侍所の御縁なるによりそふ人あるへし

きこえなりときける源の御ありさま

御法はまて色めかしき正月まてハ　同 正月と八四十九日の程也 終ハ

御法のうちあかつとハ追善を行ふ事あれ

私 四十九日のまへの法は四十九日よりうちつゝきあけほのへし

いくとせかあり　私 頭中将と三位は家にて見えしより

源のまへへ参見え三位中将御座て見えまいらふへし

同 三位中将

文武天皇四年月日太神宮麿始叙従三位正暦廿一年十

一月日坂上田村麿叙従三位元左中将是三位中将始也

かの御湯そ　同 源典侍し

おもおもしの人な　私 源の御年寄ると祖母としひてまうし

ひかりたり　同 私 らと夏といふところなり

私 末摘はおもひよしかのさいはいさ

かのいさよひのさやかならさりし

よひの月まちいてたるそて頭中将の源をみおくりしより

しし事なり　弄

私 末摘花は常陸宮のむすめ 源のおしさまは頭中将

秋のすなたと

頭にとるかけまつかたとみつかれし時のまへ比形あかりに

よく何をきこえさせかはしよもすからねてしまし　弄日

若 是ハ末摘し頭中将のかたもにたた山とよみしは花

源の末摘の君に宮まつるハ秋のすゑしまていさよひのさやか

なりし　秋といふへし

私 此の歌いさゝか遠知の歌を本にし

くもなく　かかるすかくといふへし

此あつらしく　私 是ハ従此の年十月まかりとしの

弄 一段しよれ御の問日とハみえし

私 此段の御ハ此段三位中将の御事かりての母を大宮

まいひけるし見をさまてといひかへりけれ

中将殿まいらのさしあり　弄 正良はよかり

も
中納言ハ姉妹の服三月いと白九月に絶文也衣年宿衣ハ練
有裏夏ハ生ニ無裏猜要ハ夏冬同絶文ハ移色かく深しらす
らしとハ十月の更衣の次よ文ハとらすしもらし
如
文衣の次よ絶文をとらすかしるし
秋更衣ハ四月朔日十月朔日也度し
服者更衣事
河
万寿四年十二月御堂薨長元々年夏有御法 宇治関白有更
衣被着或以素重服輩有例在服更衣勿論也 経任口云服
者或冬衣替ナ公て 并年友不為し 服支之有色 自余人不必
着之と 兄弟の服十九ハ文ハらとらし 九十月の更衣也
姉妹の服とあるゝ可勘 月文兄弟姉妹服次同三月し
物忌今はんの 私云河義をとらよ三位中納言なるに九ハ更衣まてろ九
いとあしう 河 雄核 日本紀 雄とらしき男とあん九三位中将也
夷ハおしれつまと 深し
風とあうそふ 此良の寒気をとゐ之し此為まあつらふ段間し
雨とあう雲とやあうらむ 河 文選神女賦日象帝之季女名

瑤姫未行而亡封于巫山之臺所謂巫山之女高唐之姫日朝
為行雲暮為行雨朝々暮々陽臺之下
有所嗟二首 劉夢得
庚令楼中初見時武昌春柳似腰支相逢相失両如夢為雨為
雲今不知 劉禹錫
非諸藻々煙雨微女郎魂逐暮雲歸只應長在漢陽渡化作鴛
鴦一隻飛 如 劉禹錫ヵ句をとり用
のりまへつきはへる 源のさ為し ゆりこそれて候絶
女ふくハみをとて 中将のんし 源とまうちてなくなめれん
女の歎くれこまちねまハあわしとやおのもかくしきんけるそうし
ちうり深いる嫁へて 中納の源れ方そちかく居まし
ひとりうとさしがとして 此衣れくひあまれころひとし
も
ひとの歎しうみよりてとりし久さ吐し
如
も為悦雖用中納のちかく居よりゆへまきあるきすまさを
すらしりつくろひて此衣れいとひとつるいとしなをはへ
由あるへし 寄日

これはいますこしこまやかなる　河 源氏ハ夫婦なれとも三位中
将より服なこりしこまやかにこまやかハ濃なと也
私云此注をとこまやかなるといふは子細を申事河ノ義不審
む 本書の服に三ヶ月也源氏ハ文衣とてこまやか
なるも其の浅深まさるまじとさしあてたるとも云夜
の袍の様しなよりて三の人なし　文衣ハ白き服の
人もあらはれしんや様服ハ文衣なり倫の御た(?)衆よりして
文衣をめしたる人の入ありし
私云河ノ義不審本書の服も婦妹の服大日服に有たし将
服し御しも三位中将ハ文衣の次にいろをまうすへきにてし
源ハ文衣しもかりね少人の中にはなにもかたる源の文衣
将ハ白もこころなしふうきかなけれハし
くれなゐのはやいつかなる　私弄なをみえたり
弄 将服よりの省を用る例あり見えたり下襲の色なりけん
なをきぬの中にして
む 将服に其の省を用ゐる事 長保三年二月一日定子皇女

か喪に御堂関白清ヶ火なれ下襲をとしたまへりしけれ
政事要略に甚子細あり
三位中将 中将もいとあはれ　孟 家妹なれハあはれまさるなるべし
雨となりしくるる空の浮雲をいつれの方とわきてなかめん
孟 此の歌しまいし句をうけて中将の詠也前に劉禹錫か
二首の詩のうちに只庭を孟漢陽渡とていふをこの葉上の
われいひてよまし　とて
私上の義面白しされと是なき時雨の雲にて人陰たる
ゆくゑなしやとひたりしのやうなり
孟 此語面白し佳人のかくるは少人子早く世しらさと白なり
私所取なし　やり方なき人きれ
源 見し人の雨となりにし雲ゐさへいとと時雨にかきくらす
弄 此哥をもあはれしほ句にの餘情られと念へし
孟 面白哥也結句の餘情あへし中将の哥ハ語の句をうけて詠た
れまし雨と時雨をとりて一首して哥ハ是やはし人の雨と如ホし ハ
八月わかれしかいまや十月いふうる如なしまた時雨の形

うつろふをも面を時雨にかへしひ人に対揚し
降しね折て　私　中将の心なり
源の折し入ぶらさ面白しとかなり
あやしうらし比ハ　私　年比ハ父大臣のさ面しくおもてわつらひ
給ひ又帝の御前州大宮の大切ニ給ひふしくはさりさきた
うハ人くれの御忌をとらうしにて無傷のさ也ハ真実の忌の思
しきうなんよとしくうつ葵上の御めくらしくたしきうすと中将の
思ひ給し又源の給ふたしと以比らうひらし
くしいさうりけり　私　若宿し
うせさる下葉の中にうらんとうあてしこ
河　拾遺十月つらしに常夜とおりてへのわこせもうとおれを
冬かれと思う佐日に咲ける花もへきこそうつにかへりけり
身の冬の流めれどの葉あの君しく
夕霧のめのとし中将の由らうに給ひて大宮へ源のなう給し
弄　付葉対揚し給ふと
ほ　葉うれの紅葉にあひをてしことあらはし秋のうこともてこと
少年葉すれハ葵の方あてし　ここハ夕霧なり

私云あつくしここハ夕霧なり　秋ハ葵の上の
小折の折られてや　弄　夕霧ハ大宮の源が給ふを葵上なり小次か
かつきんしちるの方し　私曰
私　後拾遺哀傷小式部内侍身まかりてむまごどもの侍りけるを見て　和泉式部
とゞめをきて誰をあはれと思ふらんこはまさるらんこはまさりけり
夕霧のさ面
霧ふかくもまつまてこそ木の葉よりあかるなれなき
私　後葉の方こその羽をとりてよあらまや
おもしろて露の秋葉の月にらへくりうくなりけりもなきうし
私　もて後葉にあをといふり面白し
私ハなき風につきてさへひとゝきまゆ給しまして源の
ゆ当つれにハそうあへの涙をとこかりし　私河海寒婦賦略し
いまもみく中く袖をくるれるうれおあれやゆやまとまとさし
弄　かれかあれかしハ葵上のあつくなりしまと
私云此物語の文章やゆまと敷へし　ここ鞍見をゝ今をとなりて　何云
きみおきて
和泉式部かはり
子持あとも
小式部ハ
くおもひ小式部ア
も親よりも
子をあはれと
あハれとみ
らんと
よりも
アワレ也

おいらしうつきくなれは　松 あはれのすくさやうときかなし
こすみのあくれは　かの女なしてあられなる事れさ女めへし
松 哀はすくさめうときみるしらいまの歌れ哀は此姫君まゝそひ
あうさ田ぬまかならしつきゝ今かしとしつゆよいらうつけたひ
御ありなしとありとしてもりへの事なからわしれなをはみるもし給
まことしきはりて源の君しつとまかし
かし見てるれと　松 書うとし
ぞまし向くとまれしと　松 源より久しく君侍流はされとし
さの物をかけりみさる　松 さやうれかといふ翁しその物し
弁 源より橋姫ぬ人久しく君侍はりて人あまは例の事侍しれ又
しやとしもし此文を向くはくらしまやうらし折ふしれ哀はつ
まかうくなれは女房のこうしもあらしもてみ給せさすうし
こされとその物をなりわかるとかへり　松 舞曰
松 此筆いさうの君ろうしあましまく一くと名れしとは御
れすりてはあまれとも文がちいしきあつ事かるに中る
もとん今さりこうゆんとしてもあまれはゆらんせをかすらしまさ

その情をたのかしぬわね中は名のよりしてあつまりしきまする都と
此橋の姫君はつまするき物うしおりしれとをするをは申とあり
はま田かしまりて前よとあうさの物とは行ありわか物よなり
つまをるあつしそとうゆやしそてまかりな
こんの名まよる　はゆ 地名唐紙
旨 えも服をの用る名もし　松 舞日
源 わまそしこれくれしそ袖は露けくまし物をの袂はあまとの袖と
松 橋姫君よりまそていらつまありて年をとふるよしなり
いつと此の田いと　源のこすを心のうちて
松 引をらとくるへす　弁 舞曰
旨 弥生月いつも此の田はうしかとかめ袖ひつわりは行りき
わすめさてつらとめく　いつるまき中よ一隠とらく梅
まてうたのするなり
をうしろき　松 此春すはあるてはとへてもゆるをぬるま
なくてあらしおもりんはさきまとし
こけてもも紫まれ　橋の流人かも物よりあはれなる事をかて

大うち山をかすめ
松　こゝまては文の詞也
い　白雲の九重まて行らむかれハ大うち山とも云へしいふかゝり白雲の　菖蒲
此歌の心ハ行の此方を大内山云の也このへすゝハ白雲の
ことすりしうくと云ひやかれ立んの
わ　大内山ハ左近も大内のうちなれハ左右の衛府ハ宜陽門の
うちに右大将の衛府ハ陽明門の内の扉にありけり中重の
門の内也西の方也凡くらり
攫の姫君の物語のまゝにこの事をおもひなすれハ今の
をいふとも高わかしとしらハこの詞にみゆ
そうちの文の詞も高き院大内山ハ大内のこと也右大将の衛府をおもひ
みハ今のす尾にある大内といふ事においてまいらせしに攫中納言
菖蒲の物語にて参りて白雲の九重まて行か物語を大内山
とも云へりとまへし事を云つくハ左源氏の君をひきつて
又おかしそうにまかへての給し此二説ハ何まとてり
同し源のこゝろにて居る事をとれ　弄曰
えやハとて
少女　松　弄ノ義ニ同し

攫姫君
う　気ありハふうつかけうちし源くまうし云の山とえんやこのこまを
松　月清日四ハかへそ此事を云中なれハ山のうちをいふとて
高くもありしとの給へともえみやぬと云也　弄曰
松きりに立あへるましまたありくかう云へとしるし
松　蔓上にさしれのしるしらむきこえかあれは白し
何事につきてもしのひやかなることゝいふとも
なし大将殿御車のうちしかるへきよしをこふれは
下さるゝへきなり　弄曰
行き合へしゆゑ　攫の家ハ叢菖のあるをきこのて源氏
まつりき合はれたるものハいはれこそとて云ひし　弄曰
松あやめなる事のよし申すへき源氏の仰くせゆかれ
ゆへよしこそ
あまりに更ニ居合わせしのもとしへきの人ありけるをとも
弄　六條御息所なとの教しける事こそあるへし
松人ハよきへしこゆる程あるやうにこゝろへ待る
此儀とハ事也あることゝ攫殿つかひなとりて宿殿にてのたまひし

たいの御息所をさへ　〽紫上とはよくおりしらせんとし
きいおりしらせしとは思へよしあしやよはおりしらせ
としおりしらぬは生もきすなし
つきしまて　〽明石上は須磨
めおやうなり　たくるき子としもあり
〽源中宮秋好は母御息所ちりぬる
こねりてしらぬめくいうなん　〽いまさ雛祭のいのちあさし
平 明石上はまことにまことにあはれかなき物のあはし
〽紫上君はたは愛と恨にまよひつつとまりしまてとふさしきとき
中納言のとき　〽葵上方の女房源の内侍頭の人 平
さやしなうすり　明石方の頭は中納言を兵部とも内侍あるし
あはれなりけり　中納言のこゝろ
たまさかには　よのつねならなりつるひまし
明らこの日ぞろ　〽源の額
みずれくしく　〽川岸の日は山方までとはあり
しかれ木のよそにをすくなくもれないとやみしかし

平 あし物しやくしらんきらんし
いうしきなり　〽葵上とも
うちなるめらん　此方は年のうへおたまま女方きとし
いうしろてきて　女方女房車は此車しあるのは夜にて
しかのすなすしうらり又源のうみ須磨はいふし随従とし
いかもなさき　〽こうしつ額葵とすし
なにりなきさぬ　〽さよりは源の御かどはあれまつの人きまのほし
あまれとみえてし　〽源のことえてし申し
なかなか哀しいつて　源の額けとてさやうにもろ人笑ふかくきんとし
んのかきん　葵の方は此もこうに摂政してさうか殿人ともり
あつはまろうとうとくしかしねといふことなりんとし
いのちこそきれけり　〽平 川方の御法なし
〽気のまゝ何にかあるのはあはれの物し物し
〽ゆからたなるめ　〽おりしろきぬるしこぬまてし
平 此額好しこらうてなし
まりかきくらうくおく　〽葵上君らうまきおかりよろしめすきとし

わいきまうハ　是あてき也　たゞ花月記に上東門院の上童也
此名あて世にてくり肴ハなきといふすさましきれうすし
あてきハいまし名乗よそ　あてきハ源の御幼しい時の葵上
うつりは源と御息のあて仰らるゝなり
かとあてきあこめ　私　衵なきハちいさきうし
くろきりさみ色ゆる文のそう也　私　服也此用ゐる也　以子妻
河　是汗衫萱草色乃黄なるところ色也　惟服也
な　萱草色ハ林子色にて大略同あひハをいうしたがうきと入てさもる
うれへうらうるき涙ながらはちるを黄なる色のまうしまうし
もしとわられさうん人ハ
おさなきんとを
んすし御へきん　私　源の御也
源の御あはれ
つくやうし　私　ゆしのあはて　葵上死去ましし時のやうは慶
立入源へきるのを見てまうしまてとし
さへゆうくし　志すき　祈とるし　まうしてハ口へゆへとれし
人々まきかくれてときうて　私　遠あはすしくそらむもし人へりうう
是かれわらし
かの御ことみ　御かたみみてとりても皆葵死去也
君ハうくうれことを　源のてしみてかの御さ也　遠地なく
いられさうハ四十九日にはか也し
御せんおと　源の家司などの人々し
あつまりかなる時也　私　此所の謂し
すうしひまありつるの袖
行て悲歌もいさゝか涙をつゝまいま源氏のあはれの御事
おもひやかなる心はへきし感情深き物しやれんと仕て出家し
かしこうまうさこへんとする也　此程源の葵方まかりし所化して
源氏の家司以下皆うしたさふらふ御へしかとかれをさうひの人々と云し
それへての願へ仰せまうす事ねハ二条院へ帰りつく源と論まへ
とてありとしこうれさ也了服物さうしく成へしと見つくへし
なみわしとうらむまうしき　私　あまうち今日よりハうくもうつれて
物へきまてもあるされしもこそこゝたにし見まうへこれん布をそ見し

ゐかさまつのもしきみ　秘 源のおほぢをいふ
宮の御まへにまゐらせられにし　源のおほみかと大后へ使して奉りし御
しひのふみし
院よりおほやけへまゐり　秘 源の朝
弄 源の令日の出仕のいそれそのへまゐりけり
あるさ夜　息児とゐまりかりにあかてやうれんと
そうするよもなくね　大宮のうへ源のおほしいらいせいの
りよかしまれそへてやよし
車門に入りけれつも　大宮いひへしを元の所にかね
おとこりやうて　又あらくいれりしらし
いとみへりけよ　秘 あらくの整備の御にし
ほそそとしきさるから　大臣のかりよ神とあてくまはりつそし
おもくへしうためらし　弄 源よもうひさ給ゆ
よいひのつねり　秘 大臣の朝
さしもあらまし記　此所もてうにていうみとめられ
うれかせりもしてきつよあうなとおほし給し

せかておほひ車門めて　おほくの朝主の御にしの所いうけた
御さ色をおほりたへし
君もしらひし　源の御にし
よくわさきに御様の　秘 源の朝
旧説 もちの御様よりの宗や世中のそれさきに御事あるかうらん 扁昭
世たさうと　秘 悪の字と読とも御らいは悪いうれといふ事なく
日本の世たらきての御とひすりことやしのれの秘哥へし
今は世をは五濁悪世とよくれさきは御代には濁悪の世とかたん
或抄さうとはあるしのれとも　悪ノ字など万葉にはよませうると
秘云りし悪の字の
さしあうりてハ　眼前あるなるは世の中すうれ山もなまされぬ哉と
源よもあうさ御ろし　侍りんよそしいらせ
秘 文帝の御ゆんと源の朝しりうての御のたり
弄 源もよくゆいおあうく枕をしまつのへしとも
さうハ此日も朝ま侍りとくれぬさきにてそのへし
秘 今おもくのんハ所時を源とさかてみ所くきたあるへきさや

さてハさみまふさ由のおくれなるかんつきぬし
私呼出しひまてあらましきさ由されハられぬさきまてゐ世
馬をあれと大臣のりまハし　やうさぎ只今源のうらかゝふ
つまりくハ立て行こき所へ　されとたゝくの物いひて
称名のたきのかゝそれし　ある所用きれ稽古ゆし
らみまいしまつる　源のみまいしあって
としこうりく　一所まいりあいまいらす様し
あきれとみまふ　源氏参んたりの
おかしさやまいしき　如 大臣の翔し夕房事し
升 左大臣の翔し女房らちまおかせくかく小中しそのあって
私夕房はかすたをれ事ふれ共
そうらうせ源の中ともさいゑ作りも
六條どのとしておいたねすハおもしと大臣なと云ふてさとなく　源のいふすいとも夕房と
如 云又ハ大臣のかゝハいきてやて人の内とすくましう
なりひやうすき女房　ふおかき女房をなくハ源のとりち様
さうらいかりやしとそって大臣なく　面白くあるやり

なかくわれわら　葵上の所おもりて源氏はまおい謀へて大臣の思
ことつりかな　大臣と名おりよ所を如
らうそけたりまいらする　如 源の葵の内方より仏そけてまし
くしてりハあらりし　かくらし
さうとつおよりと　如 やハりくハんそまいらきとたのまそるらし
きうしそんがてき　如 今日よりハかくんかとききうし
如 葵の中てし内てんかなま夕をとし　是れハ宮へ立
よりせ源の内あらしとそひまでさしまてゞ内てんかなき
つとあさてろなる　升 源乃返答し 如 同
内てんたいてうとも　やうやうおかしと葵の存生のは源の候
きおろし事をのまつと源と又陳もとし源の葵のつかさら
こけ源ハさうらし事もとりやんし
そのつい法用らうへ　やうやりとハかつてのおもさきあるまうくき
そこをおやしくこハなりくさやかなるまうしきとし
申しいぬハかくとおのとみく
升 葵のおかやし稽ハ源のかくかゝくそこくもそうしと云ふんし

いま御らんしてん　さしうさこゝかしこしらうてあつかひつゝし
今よりまゐらんせまし　大臣の源をみそかにて葵の侍なりし御人
いりゐたまふ
こゝに入給ふなりけり
られせられもあらしき　源氏君の此程の御心さしとおほしつゝ侍る
葵上も源ゐて今はたきまつらはて蜂のよめけれとかし　寿月
のたまひて下れにはなしもくおはしまして源のみこし
或抄御説に蜂のよめけれは泥はすらしをかけりして君は心なき
ものをたしも雨のさ夜かゝれと侍人のなきりとも多く侍らん
手かゝひすく　　　　　　　　如　源のし
まゐらせん人には　おとられあまりなかりまて　然侍しまふさいふし
私あまりなかるゝくといふらん　ひ年より殊く然侍し
あさつさ夜なりくとすらし　おもしくさつさ夜なりくし
あはれなゝ給ひてしも　まつしひのことくもし
かのもしやまとのよ　　　は　御前し
侍りもとまんなまて　御前のときこまのみかんなしにまさはひく

きはへるなゝらんし
かしこの内にもや　　に　哭ノ字し
松　源氏に給ひとかあのゝふなり　　　　松　草子抄
ときうくみそてまつり
大臣の源氏をとまで今はらんにひとしきぬえしとおなして云り
うちはまつりまらき衾　　　　弄　鴛鴦瓦冷霜花重田枕故衾誰与共　替
長恨歌文集　　　　円　長恨歌唐本にハ分翡翠寒誰与共とあり
第十五り出之
旧枕故衾とあるは和本のまよやおかゝる
私云百丈志室所載翡翠衾寒とし白氏文集第十二唐本ニ引
勘ニ処旧枕故衾誰与共ヿむ叶源氏の心也　　永正七七三記之
源
みな玉そいつくみしき所しとこれらきかれうらき人すむかり
むゝ　しるとちまりて前えし玉よりもなき床に行ん君をおもひき
水　家へ入り葵の前しみてさそあしられさりけつんとなけきさ
此君よろしきこしもなに夕をまさにし此前とひろり此前わ人は
なき魂のとゝろおきくるさ夜し此義不叶ん
やうなき人きへ川の女のあゝなりとくよからとのし　むゝ面白とく

紅葉をちらす床に秘ん光て とりしきまて薬はふといひをまて了
んと云やうて涙のうこしをいと悲しくとて見れは
氷さは床をおくられつきのてもの　りし宵をそやいく
霜のも向し　松 河海に連昌宮賦 文選
弄 ありしとをと向と云らへり此ことくれり申しまて
江 以前の月詩に　重子白参見もろりや安常のうし野曲を
みえし本文を没て曲府に言来と云見本実し右本に創し
物語巾ふも右羽軍墓草 初秋とあり詩と草物名と循
又四年来大倒云伝の和漢朗詠集にたかく古集の句に文字を
没て入ららうに文選連昌賦一句獲落花牖壊中秋有秋
風とありと秋色と行り示天詩に可是 径房無拠到とありと
色ふ見径房無拠到と没らう見本の例先に落毒古柳除槐
其母甚色獲病し
源 思ひて慶つりかの床は此病うちてふひて来拓わり来
ここむつと床に用ゐし云宗の標多他にかゝるれうと見え
やうり此二首は文集の二句を説にて作ることし此句にしせ

くみりくとのつらし　或抄云そし二八夜しりてすてくしく捗し
霜さゆめあしよのたちは本を枝に一色さけりやまとくえりしこ宗
私防かる事落のふりのへし　を 一月宗載に枯ねうる色と
ヒトヒ 一日もようみしうまてまします
ねて東の枝の雑にあ向と須みとく大文にをかうせのしうを
の枝此をふらひ此中にましりよくそといて
秋 上此羽に枯らり下葉此中にうらんたり接子なくのを月見のしむし　弄 月日
弄 云八夜とを床に用ひられ本限うれふ此んとわり
冬に南らん也させ　弄 大宮に花府の分んむ也を
いのひ材まうさとハ　花太花乃羽
松 養上の云常此おろひ数わりるし　宗業とといふ獻とされ
ともとすれハまこ衆しま九假のきうひし程させのにそ何にし
くりそハ浮くく　まさ哉り此かうねとらかくみく見きんその内し
此此能養のさし方にかゝ云常此おうひしされても豊のう
うるねハ甘くの世につきうきころくちくとうき由さんとしされと
称去し　さハ先きへくつくまし

この大殿に　私 源とまれ此よりも見えしに作りなとし此二文
れ此ゆへさ体おもしろく有て
まゐりたまひて　葵は源の事としかへしるとしそれは人
御子なとかゝりしにとよそへ人よそ多かりて朝夕の見えこし者
ひとつやうなりしとなけきすまはおもふ見えさ見し
義此おもしろ此経の事哉　当去左大臣なと　或抄成と八源の作さし
私 左大臣の詞のやうにおもしろもつましき人也とまう給へまいりは
とたかしよろし文義をいふと源よろしおきなとさん人とも見え
てれ此ゆへ見えと人はそれめしるまゝやうましまいて歎くへきし
私云 源と大臣との内談也へし
いとなつきかしの　夕霧の事し
あからさまにとゝめて　私 女房の所にて
さのうちて　なのれとち此事なき人し
源へ来り源へまいりて　私 源の源へおはし
おほ源来おはしてまゐりさきより源より此跡をさし
いといかう　源をおもひんして又源の詞し

さうしみて　私 権進いりみと訓せし
中宮の御方さし　私 萩つかのけふさし
承香殿の大しく　私 中宮此おほくまゐり人まうとの源
御つきせぬ　弄 御まへにておもし　弄月
は 中宮より源の詞し葵此事し
源のくに殿の御方へ仕えのとゝめつきせぬ世中此ふさ
此君のひりかね
つれなき世を　源の心すれ詞し紬と中宮よりしれぬひ
ありしよしみそかり　私云 世中此事常はさる事なり
かなはめよりて見しはつまていとりくれなかりてはるし
私 此詞書きして人わかなしく云ひとらてあり　弄月
かゝまてゝ　弄 さうね何ゝまほ後のなへは四方ま
御宰しきうらへて
其のまゝは只今此袖の宰しきましても
むまんれりへの御所に　まひ家の御下さよえへまにのふし
私 無文此袍は束は穀冬年個文は常此袍のてふ雅七無文も保 巻
服者のきこしまゐらすめしてうし　弄月

本 弄 鈍服なり
河云無文の冠に極めて　一条常の冠ハ有文の羅也服もんは
無文の羅を用也　私云近代者文ノ羅をもちゐる
四条家は文をわかたず異儀也されど世ハ無文の羅也
まうでたまひ　弄 冷泉院也
まかりけるに　まことに葵の上の喪にこもりたまふ
頃ほひとハ見ゆるに院より二条院へ退出したまふ
まれもしと思ひけれ　弄 源の見しり給ふとみゆるまゝつけても
葵のうへの事のみ思しめさるゝと也やりすてかし
物のあはれとなけきあへり　葵の女房などもさりかなしむ
弄 乃ゆへつてしハかたきや　私居並みにあり
私居すゑひ所しるし
御けしきにてまつりたまひて　ヤ 源氏ハ三ケ月の服なれバ八月
より十月までハ鈍服しまふべきこと　弔の気色おもかり
かりし隆服ハ是より後なりしハこれハ只院へ参り装束を
二条院まてる源のつま住まの東の対まて後めしたまひし

式部云二條院に花宴の説とひとつ院へまゐりのちにかへりて西の対
めくる宮のおはしますなる西対へかへらるとそて宮は源を
服衣を人にみしるやうにと
弄
みなの対まし　本 二条院乃西対也
宮の人の色あひらひ　河 十月更衣の御装束也
おつくろひ　本 かやうの色あひなきとをかきあつめ
少納言つくろひ給へし　源のおほしめし
ちいさき末丁　さし末丁かへしたるかのかたはらにハ
安なまてハ見えてねじ末丁をさしてたちてゐし
あらね西の　不足西なきとし
あらけ　少納言
わりて西すく　本 夜つかまようくおぼしまし
ちかうよりて　源の見へちかうよせてし
同しみ此御しうら　見しらぬ源の宮まど見知らいでれと気色
ゐまし去り　少納言葵のまし　ののし

志りしてとふ　如二条院の門東對なりしうちとなるしめまんや
いかりきんや　やらしおしかしみかしおくおすりせて
の跡ヶ羽なりし
粉おやらし　少納言の四帝し
白んてるき　如第子の池
志の池　足よりか御をれあやらしおりふ内といふ第子池し
立うかり　蒼のうりりまえふ人しな眞よるたんとか御を見や
らしおりかし
まられりる　二条院の門原の常に住まふかいしれ對し
中將の君と　如原の友如し
平
許りおかし東對うて非是さすしもまて
あし反まいまう男氏れりりに　如夕霧し　少女日し
何られなのかりけり　夕霧氏のとなりの東ようりまや
おかしき心れを　少女夕霧氏うくてあり仏とふ覚りありう
おりやんとは、おかりしうれのとし

姫君れのみりさ　業れ第おひとれわりのみかとし
まけ分しばかりし　やかし　新枕ともろへきのし
少女巻十四より十四まて嫁とゆるもろ付業れ物ともるれ第子去
ましきとも説なりす　けさうともろのし
こなさまく　業のれ西對かり
碁うち原んつき　少女の字乢行をうらしていひおうりれと
九條云　篇変　篇藥　弐抄云原んつまといふ字れつもりと
篇とどまけらしつてうとふしきて篇ともそて名子といふ文字を
いひおつかされ白字へ嫁うれてしけり人し橋姫巻まてらを
しく碁しう原んつきおくめり大君中君すらにとしへ混
きし古集なとのみ字をうしきつく河篇の名字とさてわしなふ子
仍るまや　松云粉君へし
うかしきもちと　如まくへのらかしきうと云よりこれ羽まて
業れ西作られよ見ゆと云う
おほしなるなりさうつ　如おきみまさのあられなり志のひかく
ありとい白かしきしきたうしる事なりとい云う

私云去夜のうらひのみてなき跡はおさな児とのこともいくらと
おもしきりうさとはおさなみんちまもしつまおもしきまひろき
くとは男女のうらひあへきしろと源のそつかすり
人のきちあ　新枕しまくすは兄来る人きすあるねなりけれ
聞よむしつまもすし枕しされとものきちのみさうるすとも思ひ
いひのつかれ
されおきさ跡はねかし多より　是は新枕の詞也
思はまくり跡くして　※源の歌くんおつしき由なし毒日
御衣の箱をは下ぬりに
ひ　みをとりて衣よりうへくとき御つかひ奉りし跡へと云なし
かくらうけく　集九さ由し
原　あやなくもへたてけるかなよをかさねさすかになれし夜の衣を
や　源のかくおきまうしめのてそをあやなくすと云
後朝の文をはやくいれまいりしかと
宮はなやすくはありさまうくとしおもひとしらすれ物くるし
うち南ゆえおもすへんとは　※集上此哥は源の真実のよなりぬ

跡くれ給ひはあかりつきてとさせまふへきことおはれぬしとさり
此御心ち恋歌し　私云然に是をかれさうのもおほえなくるとぞ只
新枕のさ面まうかれ御よまうしおきなるをさ由なりへし
あさましうおもさう　集の心
ありつきしまうう聞て　源の集九さへし
なやましくも跡ちんは　はしくすくさひ跡かし
此をひきうつき　集九さ由し
人もいふまあやしと　きちのさへのうらへまて源の此まかし
此うち由を川たり　江　論語云必有寝衣長一身有半注孔安
国曰今之被也又曰文徐双綺参裁為合歓　綺参被は繍し殺し
衾は文なし衾とはいふ四角四方し中まあうらはさうしれ
但あり女御入内の夜女御の父母着すへき例し
私云時分思し　集の此喜ありまし
霰の此いつくもしあらす　とよりはさやうれまあもしとなく
よしくさうにみえしふそまへきし
まゆそのまうれ

ねよくりのけて　九に亥の子あるへし
かゝれたる日や　あるしきなり
いとらうくけなり　源の御子忠のさまをとりてさかへし
ゐのこのあはれ　河 群志隆集日十月亥日作餅食之使人無
病　董中暦日亥子餅七種大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖
かゝれ給ひけりと　源のうへへ参らせさうしおとゝいふらし
弄 是上かりへまいらせもうすや　字多くしてハ無き葵の巻の相とて
てとくしきさ日　添し
君方れらうへに
かとくて参らせさむ日にハあらてあその書なる
此 新枕の三ケ夜のもちゐのことのみなり　弄月
字もちとくに参らせさむ日にはあらてとハ三ケ夜のもちゐハ一夜付るし
河 亥子もちゐハなめしし三日夜餅ハ一夜されハ数としてハあらてと云
ゐふいましくしき日　河 定月と云と
此 歳庭のまつりにしてかゝるへし　弄月
日とも御ゆるして　惟光やかて日ゆるしんれと申し

あいきやうなしか　此 惟光新枕の事といふ事を見て致拵し
同えうして　是も惟光かとりつくろひて中和してうましき日と
れりふとうけくやし
さても禄の子ハ　弄ニハ数定ルトニ
文字亥の子の子乃黒日ありれハ子のあへもいふて源の御意
しらすね衣おかめりてそのし　弄 秋日
河 亥の子の次日なれハ子のことと惟光か庄に申すらしやうよ
てれ名にハあらさるへし　花
此 嫁娶の三日にあたる夜餅を祝ふことにてよろつたかきらす海
とも人の死せるにハ世俗にまた餅と共にしてよろの枕つくるとい
ありけれはかうたうしつゝもとへんハ女の男のもとへ入りてハ二度父
母のもとへ帰らしまるれハ備を同定の樂を名付てとつくと
いふ文字に嫁の字を用ひたりハ女ハ夫の家を家とおもふへき
よしさて餅を用ひても仮にて男のもとにて物まうて嫁
娶の日白衣裳着ることを用るも此ゆへなり栄花物語第十
三の巻にあり餅にまたこれをうさ此十日申すうまき祝に入て

おかしきつゝかくとのゝいとむつましうおほされけれはみえしらせ給ふ
とあり是ハ御帳台の御前を小一条院よりかゝる時
のありし事を一つを語るに三坏一具此何事いひ出ハおやまほしかりしきよし
着ハ其餅四坏此外にもちひあり秘説に是はあるなり云々可尋へし
其時御三日夜餅一つ一まへ為我秘事にて一説云三日夜餅ハ
女の年の数を用るよし其上十四なれは十四をハ当しく全を四
といふんとかしん何事と云ふらんといふこれしらなうへ其貢数
定りたる物なりし　惟光いふ何ことか申へうらん其上の年齢
惟光まいらせし時是門院御入内之日夜餅記　後京極摂政
其檀紙又唐九帽具晋通の硯箱よりハ高さを大きさにて迄
御小盛に入れたる餅の丸きを出畳固の為具盛にやうにて三
日猪子もちひく盛て此器の蓋ハ銀にて御鑞鑽を作て
銀の台にて御器をくつさせん此西ありにて敷きたりし
或抄其上十四ならハ十ハともに不足といふてはひとつ
とハの餅を付物をにもなれハ何方れいやかるゝ三
ケ条やうかいの反称の子のみなのみもつかうる一条の

謙閑ハさらにいつれもたゝまいはつかしさうなと着よし秘説と
あれはおかしくきよるよりてあらんとおもはしくおもふまゝたゝしかるべし
三日の夜ひと事もまたとも　源の直答し
三の夜一つをとりも説あるとき此餅三ケ度の一たつの傍
おほまかは少女四坏とをとうくミつ一と云々
ふえいふて　私　惟光をやをて人内へさうたちなまかるさま
やとお母をかたり　惟光の詞けさあし
まうしとりふそう
里すそ　惟光か姿し
是ハいうし人まひ　其の様姫と源のしうかめし
ことしにあかれとそきこへつるハ　新枕のまへにハ其を云々しハ
三の数をもあるへし　私説云その様の人ハくらうれハ
もしハ御ても云ハさうになりけるあらゝ引云にハかたね　凡付けん
人のやうたるそてある　新枕の心ふても其をたてひなくお心地し
今ハ一とらと思うくそれにてんれよる故を云し今やかて今さら又

ものまうしつゝくと気色ばんで源の心よりまさりて
夜ふかしくまでまいりまうり　惟光はよりひまうすゝみいひて
夜ふかくおはしましつるひあるかし
あらしくや　少将か御をぬれはつひし
私云 惟光のくるりして 弁とはいへる
むもあれ弁　弄 少納言か女也
私惟光のよしなきとこゝろ　同 香壺連或香粉筥　南壺連ハ定まる
ゆつこれなんことゝいへる　士 花日以下畧之
調度也 諸香を入る器也
一説日香粉筥只普通此料紙件懸子にちいさきもあり
弐ハ統第弐ハ白粉筥弐ハ薫物筥ホト号ス香ハ薫物也粉ハ白
粉也 おと第弐 仍もちよりて第此一名を香粉筥と号之
ゑうに御枕かに　惟光は弁をいひきうもなし
あみうこあきらまりて　如 一本あたるこたちこうまても
まちつもかりていふと 弄日
少将惟光の弁とあるふんなりあり

あやしとおもへて　弁なるべし　如 弁ハゆるしきさまもあらぬし
いとこなうまゐ　弁乃朝　如 いとうさしとし 弄日
南てしたりいとはさらのし　む いとはいとよくわるときうくしてさいかしと
よし説あるの又一説あり　おもてにうき人
如 天勘にあり但いまはあるこなりうかハといふふりてありさろへきされ
少将あることいふ字弁のもし惟光のいかにし
よもましとも仰也　少将さハあるまじき仰よもしこ弁は惟光
の陳して云何し　又或抄ニハよもましきと仰し今ハ弁か
惟光とての文章しとさへやうれるハ中申せしと云へとあり
かる事ハよもまうしらしとぞ
同 おそこなるまい道ハよもまうしらしや　あし
わき人まて　弁君の事也
君ゐまいらの　源の第にいらひとゝしへなへしとし
まいりてハ何事も君の事はにとゝへさてなへきし
かくめて身もこゝさとましく　同 退 食退也　あらかれ具し
さらしきうきうれ　如 ちかくつかまつるへきとし 弄日

此さらさて　松 ゆらめのさかきし
けるく　松 巻のあはし
お伽をハいとめでしかや　嫁宴なとの事おもひやしなん
とおもしとまやとやられ末まてけんのつきしる　と古説なかる
とうましく後のうかれうし
さそそうらくは　松 お伽をんし家に涼をつきるそし
松云家にお伽をハおとろしくてたるしくやお前さんとハ
惟光の妻也 お伽をよハきつせもして弁きくまへせ
うてしお伽をハ明月数てしかてきうし
かのへも　松 惟光し　源の滞りまてうんとお伽をすとのやし
かくて後の　やうに此家と見ん物のひく後ハうへひなき
此おりひのうふさるし
あやしれんやと　源の家とおかもんかり
うひめし末と　源れ此きのひ末しもうし
いておしとおかもも　源のまりと云る去りまふ今てあれ
うもれまん家にハ云るおもしなしましてそ末りうし

影ま花の心くらしくて
は若菜の巻に影ま花をまさきてめくく夜をやつさてんまでうるおまま
松弄同し　松云上とハおまに物菜ま花菜ななくよせて
よろしも此物語文字自然ま面白し
いて物くして　かへおりせんすハかくれし
世中ぬいてうと　源の御思ひ末ぬうしくようらくめけは
おもろうしかせしも葵のうれよもりおらくまやましきを
なとのにかけとのまふさるし
今き御きハえくしけ女　むね 連夜ハ朧月夜也御連夜ハ同じ
案のかの法服るに戴隆もる末し源へ右大臣の女れ右る織し
松 今の右ハ弘徽殿ほくしけ后と朧なり
大将のをんうけ　朧ハ源よのとんとりまいしかうて
きまひこ面んてとおりうつ　葵上なくし成しつめうてりと
右大臣ハ元らよりぬまり
いとふくうしと　松 源への牟を弘徽殿ハことおもんひとう於ハ
まそふくうしとおかまし

気つくへきおさなくして　同 古今集その人かゝ方のみつきり
おさなくしてもおのかれ　頼長
伊勢物語まことまきれなく文をたゝさなくしてかゝくも
新恒序云あらしのおさなくし名れハおかしくもみせ侍る
おさなくしてハ長と女ましおかしきたるもおなし
初ハからうへきの　此分甚し
其名おさなくハ気つくへとも法定うくたいしなつかしと
源をわくとおかもそ所ハ川すきそし内へ書かんすとおかし
まけまれし
来たとしなつく　源の仏
如 源をさしとハおかまとれと今のわかしてみえまて
松屋ハ其あのおかしく侍んかき成し
かくておかれさうまり　宗匠まて定まりんとし
おかしうかう　茶の西のかまかくらせしみし
かの気を亦ハ　人のらしみてあつまりしうきうとおかしうきま
きうといつきよう人法是味しいかいさうあさいせていうし

まてのよう人　六帖是示と本書ニ六仏おうしくすねへしとし
それうやうまて　此分られよく何それうし此要ハその方に
いひ合すうへきんなせなきてハしまうしきとなうまて
おかしなりうれ　法是宗の法うきうしハ忌れうなまれと
をえたしのかよハ源のなう師なねとし
二の稲君をいまうて　如是上し文ハ芳月にて気し
宗匠の信姉とさしつね　あまの方うへのかゝりんとし
おゝ気よ　芳月て気し其の系労をあつりさん為し
侍ゆき兄事　宗の方祀し
こゝよかう字とみ　堂ハ新枕乃後とみまて
年もうろう何よ　兄もう其れん源をらとくさてふ
人をとらいのへうり
さやうまさ兄んおさせ　名残の月を兄ん合せ取らぬし
おうしいもあらし　宗のうしさ白し
ねうしうハて花しうと　源の仏其れさ白きとそうて
されハ由さうぬ　如弄 同少し司

ゐみかうすかりたるかそのかの集のうれいまさりて忘れまさりける
月まろぬ　な　源氏二葉十なまめかして　如月弄月
憎ま来りゆくそ　相声し先丈見りとへ来り給へくりき同
裏書云宮へも来りのふる也
されよりた夜ま　人さたに左大臣へおはしまして
むかしれ侍すしも　とくれ給すりてをりりぬへし
いとうくさく　源のおはしまうう源のるかされたらし
さへうう　父左大臣母宮りくし思ひあへれへうるへく
なりさこをりうそなり
れこしれくりる侍　源の浜物とちり完ろひ給へるさ白し
多りおもくれりとう　葵れ里亭源とはかのしうし
人くとをかうしう　こうにさふ内女房達し
若君もうそてまつり　夕霧し下し二葉し
まうひうらま　とるまいなうらにとみて若君の息とうれしき
春宮のゐたむしさ白　夕霧れ冷泉ま似たし
見たてまつりとくしれと　冷へ夕霧れ似のへるをとへやあへとグ

かんと源のおはし
たち行らひあり　源と葵のおはせし時まうつらねし
見そりけれ侍そうて　如さかし　河椸架迄
ㄖ椸架迄荘式　沖衣架し　衣荷　神衣　内則曰男女不同
椸架不紋懸說文之揮椸架　棚子架同　注云　謂之椸楯村也
今案葵上の存日ま行はれまいは源氏とふもまし　いまはみけうへ
もとと云し　礼記の人まいうりつへし
女れ々のうりね　礼記まて男女椸架を同しう女源とわれし
葵れ存日まも源のこひとけいうまうけるかふくいあるへくも
椸架をかへくおこまうけるかなくしさて女の椸架のすう
ともあひまうくしきてとみろへ
皇かいこうしくてふすへ思ふと　或抄作僞ま衣架いかく
宮と椸架とつゝいうて情ま氏やうゆして衣をとり侍めしと
年始すれい葵の熱傷を思ひやりも源のおはしまか　如かられ
かくれくちのとれめさし　若君す太くま氏則し　思ふまりよ
荷まあうひまあうれもうひ　源の装束をなふまて年ま来

きこてられしるさしきれとそハ深よふらうて文あひきつ
くる物しとし
ち　葵花まつやねをとらちる杯し
ゑふゆりやつれさせる人
松　物なら佳しきこめていつくまも法服ハあまさる人々れをなふ
きろうハ何う路へとし　大家ろ此花さつうを畢下しく
の路りこれころハ深まうれて文あひをあしきとやつれさせ
まへとハかの奥葵の名残をとも　いへし
みつきさて　いくなとつし花をまとなりるまハ又内使して
多くもまちろう路らし
くるうさ久つるてもうるへき
何とんとて我入あつて
文まま家もなりき申ともつれうれハ只今深のき路ゝす八曲
なつおかさんと見しくちうれをきぬらし
かいうつやうらく　松　これとは海ま畢下しうらし　とく
是ハ路ふ多めてもうさ申て四まつてしるうれもそのうひも
うつし物ともまち畢下とてるうしれ事ん在他し　なつく

松　今日花えこれ用とてまよ路
松え日まき路とおりきハ路

ささまうは　松　深のんと何まうけまへるとそつて
松　今日深花内おあつハ口打しうるへきよしし
何をりハ
まやきねるとも　深の紐　松　川ちなし中中日
年　口六帖
おくるきて何くるてしと百とその書やきける者と当きてなく
此ちおあ南せうとてみをを夕
書れたりしやるみてまつやしれんたうあくもまへきれと
えまこつとさせ　沢の人々のうてをとして
松　中やろうるまなきし
葵花ますすすいろ
深
あまさとうりもふあつるあし文めくろうてきくいすゝとを有つゆちまる
近衛
あまさとしハ数年し　松　下向ちれし去年まつゆうちうし
えうそやふ路へ去川み孫　是まく深の紐
あさりしき年とてもいうる中まハ布つわちくのうとく　かうううわ
松　参儀おりてまハおもしてぬしいりろすく　葵花よれこつま
あつよしし
年のあつく申うくちうしまさく深のとまうとし　ちう

注　かの人のとゞこにつけて下の巻けんあり
あやしき事といひてよろこびける事多かりけりまことなる
此川おほよそなん
よろづ人きゝすおそれあへりや　其の心地し
武士云四ハ源氏もたいらもあはれなゆかしとおもひ給ひしかなひ
てもつくりてあさましうおぼえしとよみつかひめれ
人の國としもみなかりしめづる四ハいひつたりちからなきたる
へきるそてハあやしとてあらし仰る此ひの内外傳
の口まとひまでと繁してまかめきし